

Olympic

オリンピック教育

Vol.9 2020/04-2021/03

Education



筑波大学オリンピック教育プラットフォーム
筑波大学附属学校オリンピック教育推進専門委員会

目次

はじめに

オリンピック・パラリンピック教育の再考	溝上智恵子 ... 2
ご挨拶	真田 久 ... 2

研究・活動報告

令和2年度スポーツ庁委託事業「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」実施報告	
真田 久、宮崎 明世、大林 太郎、鈴木 王香、福田 佳太 ...	3
コロナ禍に対応したオリンピック・パラリンピック教育教材の提案	宮崎 明世 ... 5
国内ユースフォーラム2020ークーベルタン-嘉納ユースフォーラム2020 兼 JOA 第8回ユースセッションー実施報告 ...	
中塚 義実 ...	8
榊葉町立榊葉中学校（福島県）での特別講義	真田 久、大林 太郎 ... 15
「2020 横浜スポーツ学術会議（2020 Yokohama Sport Conference）」研究発表報告	宮崎 明世 ... 16

実践報告

附属小学校	平野 次郎、横山みどり ... 17
附属中学校	秋山 和輝 ... 21
附属高等学校	鮫島 康太 ... 24
附属駒場中・高等学校	登坂 太樹 ... 26
附属坂戸高等学校	藤原 亮治 ... 28
附属視覚特別支援学校	山本 夏幹 ... 30
附属聴覚特別支援学校	岡本 三郎 ... 32
附属大塚特別支援学校	山口裕紀子 ... 34
附属桐が丘特別支援学校	寒河江 核 ... 36
附属久里浜特別支援学校	河場 哲史 ... 38

特別寄稿

フランシュ・コンテ大学オリンピック研究センター（CEROU）の組織的構造と活動内容	
フランシュ・コンテ大学副学長（オリンピズム担当）、大学オリンピック研究センター（CEROU）ディレクター エリック・モナン	
フェリス女学院大学教授、CEROU 招聘研究員 和田浩一 ...	40

はじめに

オリンピック・パラリンピック教育の再考

筑波大学附属学校教育局教育長・副学長 溝上 智恵子

2021年4月に筑波大学附属学校教育局教育長に着任しました。筑波大学附属学校群11校の教育がより充実したものとなるようつとめてまいりたいと思います。

さて、昨年（2020<令和2>年）夏、オリンピックとパラリンピックが日本で開催される予定でしたが、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）拡大に伴い、残念ながら東京2020オリンピック・パラリンピックは1年延期されました。しかし、筑波大学では2020年度も附属学校群11校をはじめとして、さまざまな教育組織や研究組織において、オリンピックとパラリンピックに関わる活動が展開されました。その中で附属学校群の活動報告と実践報告をまとめたものが本冊子です。個々の活動内容については、ぜひ本冊子をご覧くださいとて、全体の概要を見ますと、オリンピックとパラリンピックに関する教育活動は、体育科に限定されず、音楽科、家庭科、総合的な学習の時間等々においても展開されていることがご理解いただけます。さらにeスポーツやアダプテッドスポーツにも積極的に取り組まれていることもご理解いただけたと思います。

2020年度もスポーツ庁委託事業「オリンピック・パラリンピックムーブメント全国展開事業」の進捗状況との共有を図りつつ、附属学校群におけるオリンピック・パラリンピック教育の進展につとめた年でもありました。

2021<令和3>年度を迎えても、新型コロナウイルス感染症をめぐる状況は依然として不透明であると言わざるを得ませんが、こうした状況の中だからこそ、スポーツの意義を再考し、世界のアスリートが集うオリンピックとパラリンピックの役割をじっくりと問い直すことができるのかもしれません。オリンピックとパラリンピック教育に直接携わる教職員のみならず、児童生徒たちも含めて私たち一人一人がその意義や役割を考えるのに良い機会になれば幸いです。

ご挨拶

筑波大学体育系、CORE事務局長 真田 久

2020年度は全国15府県・政令市でのオリンピック・パラリンピック教育が行われました。また附属学校群においても多くの取り組みが行われ、それらのうち、附属小学校、附属聴覚特別支援学校および附属桐ヶ丘特別支援学校の実践については、本誌のみならず、スポーツ庁の実践報告集にもモデル授業として掲載されることになりました。コロナ禍における取り組みには、戸惑いもあったことと思いますが、先生方の英知と情熱で、対面とオンラインをそれぞれ駆使され、新しい取り組みも進みました。附属小学校では、5学年音楽科の題材「音楽の旅」に合わせて、大会の表彰式で流れる世界の国歌を鑑賞して学習したり、6学年家庭科では、オリパラとSDGsを関連づけて学習したりするなどの取り組みが行われました。聴覚特別支援学校では、車いすバスケの講演と体験が行われ、附属桐ヶ丘特別支援学校では、家庭と学校をオンラインで繋いで、話し合いながらボッチャのゲームを行うなどの取り組みが行われました。

また大学においても、コロナ禍における教材として、「スポーツの意義・価値について考える」、「オリンピックの在り方について考える」、「やってみよう！トレーニング計画の作成」、などを作成し提供しました。

以上のようなコロナ禍における教材や実践事例は、東京2020大会を契機としたオリンピック教育のレガシーとしても貴重なものだと思います。これまでの実践を踏まえ、いよいよ大会本番の年度を迎えることになります。文科省ではギガ・スクール構想を進めており、これとの連結を図ることも考えられるかもしれません。さまざまな困難は続きますが、持続的な発展を目指していきたいと思っています。

令和2年度スポーツ庁委託事業 「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」について

筑波大学体育系、CORE事務局 真田 久、宮崎 明世、大林 太朗、鈴木 王香、福田 佳太

筑波大学（CORE）は、2015年度よりスポーツ庁委託事業「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業（初年度は調査研究事業）」を受託し、東京2020大会に際する日本全国に向けた「オリンピック・パラリンピック教育」の普及・促進を行っています。本年度は3大学（本学、早稲田大学、日本体育大学）、45地域拠点（全67自治体のうち）が参画し、本学では主に15地域拠点（宮城県、福島県、茨城県、群馬県、長野県、愛知県、京都府、和歌山県、島根県、山口県、徳島県、愛媛県、福岡県、京都市、北九州市）とともに本事業を展開しました（事業の背景および推進体制等については、本誌vol.7（第7巻：pp.3-5）をご参照ください）。

本年度の本学における主な事業内容は、次ページの表1の通りです。全3回の「全国中核拠点会議」に出席し、スポーツ庁および関係団体（内閣官房オリパラ事務局、東京2020組織委員会、東京都教育庁、日本オリンピック委員会、日本パラリンピック委員会、日本財団パラリンピックサポートセンター、筑波大学、早稲田大学、日本体育大学）と情報共有を図りつつ、新型コロナウイルス感染症拡大を考慮してオンライン形式での「全国セミナー」および「全国ワークショップ」を開催しました。さらに、各地域拠点の指導主事等（コーディネーター）に対してオンライン会議システム対応端末の貸出を行い、リモートでの教員研修会や各推進校の支援を行いました。また、本学の附属学校群では、本誌に後述されるように様々な試みがなされ、大会後のオリンピック・パラリンピック教育の継続性について検討が進められています。

令和3年度は、大会本番年の機会を最大限に生かし、関係団体および各教育委員会と協力して、感染症対策を考慮したオンラインを活用するオリンピック・パラリンピック教育の方法を検討し、より有意義なものになるよう努めていきます。



写真1. 全国ワークショップの様子
(令和3年2月18日実施 オンライン会議：Zoom)

表 1. 令和 2 年度の主な事業スケジュール（筑波大学関係分）

実施時期	事業内容
4 月	・ 大学内における推進体制の整備 ・ 各担当地域拠点との連携体制の整備 ・ 各推進校等におけるオリンピック・パラリンピック教育の実践支援（～2 月） ・ 筑波大学附属学校群におけるオリンピック・パラリンピック教育のモデル授業研究・開発（～2 月）
5 月	・ 各担当地域拠点への情報提供資料の配布 ・ 第 1 回全国中核拠点会議への参加
6 月	・ 各担当地域拠点のコーディネーターへのオンライン会議システム対応端末の貸出（～3 月）
7 月	・ 全国セミナーの開催 ・ 「実践事例集」（令和元年度分）の発行
8 月	（上記事項の継続）
9 月	（上記事項の継続）
10 月	・ 第 2 回全国中核拠点会議への参加
11 月	（上記事項の継続）
12 月	（上記事項の継続）
1 月	・ 第 3 回全国中核拠点会議への参加 ・ 福島県地域ワークショップへの参加、実践支援
2 月	・ 群馬県地域ワークショップへの参加、実践支援 ・ 宮城県地域ワークショップへの参加、実践支援 ・ 愛媛県地域ワークショップへの参加、実践支援 ・ 島根県地域ワークショップへの参加、実践支援 ・ 山口県地域ワークショップへの参加、実践支援 ・ 徳島県地域ワークショップへの参加、実践支援 ・ 全国ワークショップの開催 ・ 茨城県地域ワークショップへの参加、実践支援 ・ 北九州市地域ワークショップへの参加、実践支援
3 月	・ 事業報告書冊子および事業報告用ウェブページの作成

詳しい日程等の詳細は、CORE のウェブサイトにおける事業特設ページ（<http://core.taiiku.tsukuba.ac.jp/consignment>）をご確認ください。

コロナ禍に対応したオリンピック・パラリンピック教育教材の提案

筑波大学体育系、CORE 事務局 宮崎 明世

2020 年初頭から始まった新型コロナウイルスの世界的な感染拡大（パンデミック）を受けて、2020 年 3 月 24 日、7 月に予定されていた東京オリンピック・パラリンピックの 1 年間の延期が決定された。オリンピックが疫病によって延期されるのは史上初めての出来事である。3 月 2 日からの全国の小中校、特別支援学校の休校措置に続いて 4 月には全国に緊急事態宣言が発令され、自由に外出できない日々が続いた。学校の休校期間、学校現場では課題やオンラインによる授業を工夫して、学びを継続させる必要に迫られた。その結果、オンラインの普及の程度には地域や学校によって大きな差があることが露呈し、急速なオンライン化が進んだともいえる。

このような状況下で自由に外出できないことで大人も子どもも運動不足が顕著となり、身体的な問題だけでなく、精神的・社会的な問題も指摘されるようになった。外出自体を自粛するような状況の中でも、運動機会の確保のための散歩やジョギングは許され、実際にそういった運動を習慣化する人も増えた。これまでに想像もしなかった事態に直面し、改めて運動やスポーツの価値が見直される機会となったことも事実である。学校においてもオンライン授業が進められる中で、運動そのものの、また運動を通して学ぶ教科である体育・保健体育は困難に直面した。このような状況下でも活用できる、また、このような状況だからこそできる教材を開発することが必要ではないかと考え、筑波大学オリンピック教育プラットフォーム（CORE）では、2020 年 7 月に以下に示すような 3 つの教材をホームページに掲載した。

それぞれの教材は、オンライン授業でも活用できることを前提として、教師から問題提起と情報の提供を行った後、ワークシートを使って個人が考える時間を確保し、各自の意見を持ったうえで少人数でのグループ活動を行う形式とした。実際の活動では、教師が一方的に説明するのではなく、生徒の調べ学習の機会を積極的に取り入れることを推奨している。グループワークの後、クラス全体で各グループの話し合いの結果を共有することとした。オンライン（同時双方向）で行う場合でも、初めは全員で問題意識の共有と必要な知識の確認、ワークシートやグループワークの行い方を指導した後にグループに分かれて、話し合いを行い、時間を決めて全体の部屋に戻って来させて、共有を行うことで授業が実現できる。

教材 1. スポーツの意義・価値について考える

<問題意識とねらい>

オリンピックはつねに様々なりリスクにさらされており、古代オリンピックは、都市国家間の戦争と農作物の不作、疫病の流行などによって国が疲弊し、困りはてた国の執政者が神のお告げに従って、競技会を神にささげたのが始まりといわれる。オリンピックは平和の上に成り立つものであり、平和を危機にさらすものは戦争だけではなく、災害や気候変動、そして疫病の流行などがある。

本授業では、新型コロナウイルスの感染拡大により自由に活動できない経験を通して、改めてスポーツの意義・価値について自分なりの視点から考えられるようになることをねらいとした。

<具体的な活動>

競技団体や選手が発信する動画を見せたり、その URL を紹介したうえで、下記の観点からスポーツやオリンピック・パラリンピックの価値を考えさせる。

- 1) オリンピック・パラリンピックの開催が延期されたことで、代表に決定している、あるいは目指しているスポーツ選手たちはどんな気持ちになっているでしょう。また 1 年後の大会に向けてどのように考えているのでしょうか。それを見たり聞いたりして、あなたはどのように思いますか。
- 2) スポーツを「する」観点から、スポーツをしないとどんな変化があるでしょう。
- 3) スポーツを「観る」観点から、スポーツを観る機会がないとどんな変化があるでしょう。
- 4) スポーツを「支える」観点から、今、皆さんができることにはどんなことがあるのでしょうか。
- 5) 上記の考えを踏まえて、スポーツやオリンピックにはどんな価値があると思いますか。

教材2. オリンピックの在り方について考える

＜問題意識とねらい＞

東京 2020 大会では、すでに東京で行われることが決定していたマラソンの会場が札幌に移されるという問題が起きた。なぜオリンピックは、暑いとわかっている夏に開催されるのか、開催都市に莫大な資金が必要なのはなぜか、このままでは、今後オリンピックを開催しようとする都市がなくなること考えられる。肥大化しすぎたオリンピックは、その在り方を考え直す時が来ているのではないか。

本授業では、オリンピック・パラリンピックが延期されるという前代未聞の事態に際し、改めてオリンピック・パラリンピックの在り方について、根拠を持って考えられるようになることをねらいとした。

＜具体的な活動＞

オリンピックの開催について、下記の観点から、何がなぜ問題か、その解決方法について考えてみよう。

- 1) 大会をいつ開催するのがよいか、それはなぜか、それによって考えられる影響とその解決方法。
- 2) どこで開催するのがよいか、開催都市をどのように決めるのがよいか、それはなぜか。
- 3) お金をかけずに大会を開催する工夫を考えてみよう。何にお金がかかっているのか、それをどうすればよいか。
- 4) 競技種目数は適正か、どうすればよいか。それはなぜか、そうすることによってどのような影響があるか、それをどう解決するか。
- 5) 競技会場や施設の問題

オリンピックの在り方について考えるワークシート

＜課題＞ 2020 オリンピック・パラリンピックの開催が延期されました。1 年間の延期となりましたが、改めて大会の開催を見直すとしたら、どのように考え直すとよいか、問題点とその解決方法について考えてみましょう。

1) 開催時期：

いつ開催するのがよいか、それはなぜですか

()

それによって考えられる影響とその解決方法

()

2) 開催都市：

どこで開催するのがよいか

()

どのように開催地を決めるのがよいか、それはなぜか

()

3) 莫大な運営資金（お金がかかりすぎる）：お金をかけずに大会を開催する工夫を考えてみよう。何にお金がかかっているのか、それをどうすればいいか。

① 競技種目：

種目数は適正か、どうすればいいか

()

そうすることによってどのような影響があるか、それをどう解決するか

()

② 競技会場、施設：お金をかけずに大会を開催する会場・施設の工夫

()

図1. 「オリンピックの在り方について考える」ワークシート

教材3. やってみよう！トレーニング計画の作成

＜問題意識とねらい＞

コロナ禍において、緊急事態宣言下のみならず自由に外出できず、トレーニングもできないような事態を受けて、多くのスポーツ選手が自宅のできるトレーニング内容を動画配信した。これらを利用することで、児童生徒が様々なトレーニングに興味を持ち、自分にもできる運動を選んで楽しみながら実施することができるのではないだろうか。

本授業では、自由に外出や運動ができない事態に直面して、改めて運動の楽しさ、心地よさを味わい、さまざまなトレーニング方法に興味を持ち、自分にもできることを考えることをねらいとした。

＜具体的な活動＞

スポーツ選手や団体が配信している動画を見て運動を試してみましょう。その中から自分が続けられそうなものを選んで、トレーニング計画を作りましょう。運動の種類のバランスを考えて、1週間のトレーニング計画を立ててみよう。どんな運動を、どれくらい（回数、セット数、頻度）どのようにやればよいか、それはどこを鍛えていることになるのか考えて作成しよう。

あなたの好きなスポーツ、好きな選手が情報を配信していないかチェックしてみよう。

スポーツの意義・価値について考えるワークシート 中高生用

＜課題＞コロナウイルスの感染拡大を受けて、今まで通り自由に生活できない日々が続いています。こんな時だからこそ、スポーツやオリンピックの価値を見直してみましょう。

① オリンピック・パラリンピックの開催が延期されたことで、代表に決定している、あるいは目指しているスポーツ選手たちはどんな気持ちになっているでしょう。また1年後の大会に向けてどのように考えているのでしょうか。それを見たり聞いたりして、あなたはどのように思いますか。

② 自由に活動できない生活を体験して、以下の観点から考えてみましょう。

① スポーツを「する」観点から、スポーツをしないとどんな変化があるでしょう。

② スポーツを「観る」観点から、スポーツを観る機会がないとどんな変化があるでしょう。

③ スポーツを「支える」観点から、今、皆さんができることは何かあるでしょうか。

③ これらのことから、スポーツやオリンピックにはどんな価値があると思いますか。考えてみましょう。

* みんなの意見を共有してみよう！

図2. スポーツの意義・価値について考えるワークシート

やってみよう！トレーニング計画の作成 ワークシート

筑波大学オリンピック教育プラットフォーム

＜運動内容＞

運動名	鍛えられる部位	回数（セット数）	行い方
①			
②			
③			
④			
⑤			

* 運動内容に番号を付け、下記の計画表に運動を行う日時を記入する

* 必要に応じて行を増やして下さい。

＜運動計画＞

時間	月	火	水	木	金	土	日
朝 ()							
午前 ()							
午後 ()							
夜 ()							

＜発展例＞

* 運動をやってみて、どう感じましたか。1週間の成果をレポートしよう。

* 長期的に取り組ませ、生活習慣の Quality Control (QC) シートと合わせて活用し、健康的な生活の設計・管理に役立てられる。長期休みの課題としても有効。

* 成果をもとに実現可能な回数やセット数に調整しましょう。

図3. やってみよう！トレーニング計画の作成ワークシート

国内ユースフォーラム 2020 -クーベルタン-嘉納ユースフォーラム 2020 兼 JOA 第 8 回ユースセッションー 実施報告

筑波大学附属高等学校 中塚 義実

国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム（国際 YF）が 1997 年度より隔年の持ち回りで開かれている。世界中から高校生 100 名以上が集まり、座学や討議、スポーツやアート活動を通してオリビズムを学び、互いの交流を深め合う場である。主催は国際ピエール・ド・クーベルタン委員会（CIPC）である。

日本からは 2009 年より生徒の派遣を開始し、2011、2013 年は筑波大学附属高校から 2 名の生徒が参加した。ここまでは「オブザーバー」であったが、日本の生徒の評価は高く、2015 年から 7 名のフルメンバーでの参加が認められた。2013 年 9 月に 2020 東京オリンピック・パラリンピックの開催が決まり、国内の「オリパラ教育」推進に追い風が吹く中で、国際 YF への派遣生徒の選考会を兼ねた高校生向けのオリンピック教育事業が企画され、「クーベルタン-嘉納ユースフォーラム（国内 YF）」が始まった。初回は 2015 年 3 月 13～15 日に筑波大学で開催され、同年夏の第 10 回国際 YF への派遣生徒を選考した。

以後、偶数年度の 12 月に国内 YF が 2 泊 3 日で行われ、翌夏の国際 YF への派遣生徒を選考する流れができた。筑波大学とともに中京大学でも、日本オリンピックアカデミー（JOA）のユースセッション事業として開かれるようになり、両事業から生徒を選考する形となった。2019 年度には CIPC の日本支部として日本ピエール・ド・クーベルタン委員会（CJPC）が設置され、選考と派遣を担うようになった。また奇数年度にも「クーベルタン-嘉納ユースフォーラム」は東京都高体連研究部の主催事業として開かれ、2017、2019 年度には筑波大学附属高校敷地内の桐蔭会館にて、2 日間の通いの形で実施された。特定非営利活動法人サロン 2002 はこれらの事業に共催者として名を連ね、理事長が全体のコーディネーターを務めるとともにいくつかのプログラムを担っている。

2021 年はキプロスで第 13 回国際 YF が予定されていた。7 名の派遣生徒は 2020 年 12 月に筑波大学と中京大学で開かれる国内 YF で選考することにしていたが、コロナ禍における宿泊行事は困難である。そこでオンラインでの開催に切り替え、筑波大学と中京大学が共同で主催した。開催直前に 2021 年夏の国際 YF の延期が正式に発表され、選考の目的は少し後退したが、高校生年代へのオリンピック教育をメインに実施した。

さまざまな困難はあったが、オンラインでの 2 日間のプログラムは充実した内容で、参加者の評価も高く、今後へ向けて大きな可能性を感じるものとなった。1 月末には CJPC によって 7 名の生徒が選考され、2021 年中に国際 YF の代替イベントが開催された場合は、今回選考された生徒が参加することとなる。

国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム

第1回	1997年	ル・アーブル(フランス)
第2回	1999年	マッチ・ウエンロック(イギリス)
第3回	2001年	ローザンヌ(スイス)
第4回	2003年	アレンツァーノ(イタリア)
第5回	2005年	ラートシュタット(オーストリア)
第6回	2007年	ターボル(チェコ共和国) ... 日本に紹介
第7回	2009年	オリンピア、パリニ(ギリシア) ... 日本初参加
第8回	2011年	北京(中国) ... 筑波高から2名
第9回	2013年	リレハンメル(ノルウェー) ... 筑波高から2名
第10回	2015年	ピエスチャニ(スロバキア) ... 日本から7名
第11回	2017年	ウルヌルメ(エストニア) ... 日本から7名
第12回	2019年	マコン(フランス) ... 日本から6名
第13回	「2021年キプロス」だったが...	

1. 事業概要（実施要項より引用。一部修正）

【目 的】

- 1) オリンピック教育：日本の高校生にオリンピック・ムーブメントやオリビズムを理解させる
- 2) 選考：2021 年予定の国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラムへの参加者を選考する^{注 1)}

【主 催】 筑波大学オリンピック教育プラットフォーム（CORE）^{注 2)}

中京大学^{注 3)}

【共 催】 日本ピエール・ド・クーベルタン委員会（CJPC）^{注 1)}

特定非営利活動法人サロン 2002（NPO サロン）^{注 4)}

特定非営利活動法人日本オリンピックアカデミー（JOA）^{注 5)}

【協 力】 東京都高等学校体育連盟研究部^{注 6)}

中京大学スポーツミュージアム^{注 7)}

【期 日】 2020 年 12 月 26 日（土）、27 日（日） ※両日とも 9：00～17：00

【会 場】 オンライン（Zoom を利用）

【参加者】 高校生 32 名（および参加校教諭ほか関係者・運営スタッフ等）筑波大学附属高校（3 名）、筑波大学附属坂戸高校（2 名）、中京大学附属中京高校（11 名）、帝京高校（8 名）、自由学園男子部（2 名）・女子部（4 名）、クラーク記念国際高校（2 名）

【プログラムとスケジュール（時程は実際のもの）】

◆ 12 月 26 日（土）

- 9：00～10：00 オープニング／オリエンテーション
- 10：10～11：00 講義① オリンピズムとクーベルタン^{注 8)}
- 11：10～12：00 講義② オリンピックと疫病^{注 9)}
- 13：00～14：50 講義③ 国際スポーツ大会におけるおもてなしの心^{注 10)}
- 15：00～17：00 演習① 中京大学スポーツミュージアム活動（オンライン見学とグループ活動）^{注 11)}

◆ 12 月 27 日（日）

- 9：00～10：30 演習② OVEP を用いたグループ活動^{注 12)}
- 10：40～12：10 演習③ 英語での討議^{注 13)}
- 13：10～15：00 演習③のまとめと発表（日本語）^{注 13)}
- 15：10～16：00 オンラインエクササイズ^{注 14)}
- 16：00～16：45 クロージング
- 17：00 解散 ※課題レポートを 12 月 28 日（月）中に提出する^{注 15)}

（参加費無料）

2. 2 日間の様子

・ 12 月 26 日（土）

オープニングでは本事業の趣旨、2 日間の概要を説明した。国際 YF が 2022 年に延期されたため、当初「第 13 回国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム（2021 年、キプロス）への参加者を選考する」としていた目的が、「2021 年予定の国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラムへの参加者を選考する」と改められたことを伝えた。各学校 3 分程度の「学校紹介」では、個性的な各学校の取り組みが紹介された。

講義①では近代オリンピックの創始者クーベルタンの思想と行動を、講義②ではオリンピックが古代から近代にいたるまで、戦争と疫病からの復興が大きなテーマであったことを、100 年前のアントワープ大会を題材として学んだ。昼休みはしっかり確保し、13 時に再開。15 分前には入室可能とし、生徒同士が自由に話し合える場を設けた。初対面の人とオンラインで会話する難しさはあったが、このような時間を何度か設けるうちに生徒同士の会話も徐々に弾んでいった。

午後の講義③はグローバルマナーについて、「おもてなし」をキーワードにした学習である。グループ活動の時間も設けられた。演習①は、まず中京大学スポーツミュージアムの展示物を学芸員の方がカメラを動かしながらライブで紹介、普段のミュージアム見学よりもじっくり鑑賞できると感じた。後半は、すべての五輪参加者に与えられる「参加メダル」をグループごとに作成する活動である。約 30 分しかなかったが、各自が手もとに用意した紙と色鉛筆、クレヨンなどでメダルの案を作り、グループで一つのアイデアにまとめる活動は、オンラインの可能性を感じさせる試みであった。各グループがつくったメダルは缶バッジとなって参加者に送付された。



図 1. 参加メダル

・ 12 月 27 日（日）

前日とは異なるグループで演習②③が進められた（②と③は同じグループ）。演習②は、聖火と聖火リレーについて学んだう

えて「聖火リレーをデザインする」活動である。グループごとに割り当てられた地域を聖火リレーが通る設定で、どのコースを選ぶか、誰を聖火ランナーにするか、コロナ禍での留意点は、などについて意見をまとめた。30分弱の短い活動ではあったが、工夫しながら意見交換する姿が印象的であった。

演習③は国内 YF の柱となるプログラムである。ここまでの学びを生かして「コロナ禍において東京 2020 大会を開催する意義」について議論した。90 分間は日本語 NG である。英語でのコミュニケーション、しかもオンラインということで、画面を共有しながら作業したり、手もとにある紙に書いたものを示したり、さまざまな方法で意思疎通を図っていた。昼休みを挟んで午後は日本語で演習③の成果をまとめ、各班が発表して活動を終えた。言葉の壁とオンラインでのグループ活動の難しさをどの班も感じ、苦労していたようだ。

最後は、全員が着替えて画面の前で運動した。筑波大学附属高校の「朝体操（ブラジル体操）」も自由学園の「デンマーク体操」も、自宅学習期間中に実際に行われた運動プログラムである。音楽に合わせて生徒たちは楽しげに体を動かし、締めくくることができた。

クロージングでは各学校代表 1 名が感想を述べるとともに、CIPC 副会長の田原淳子氏が締めの挨拶をし、コーディネーターの中塚がコメントして閉会となった。終了後もしばらく別れを惜しんで会話をを楽しむ様子が印象的であった。



図 2. 集合写真

3. 参加者の声

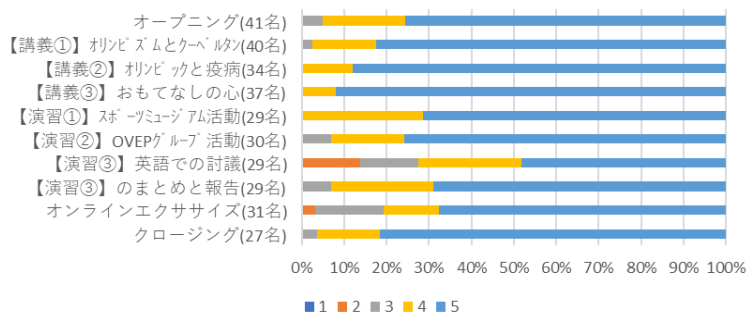
各プログラム終了後すぐに-googleフォームを用いて 5 段階で活動評価をもらった。未提出者がいるので人数は多少ずれがある。また高校生以外のオブザーバーの回答が数名ずつ含まれる。

いずれのプログラムも高評価を得た。特に初日の講義はいずれも 8 割以上が「5」と高い。

英語での討議や討議のまとめについては、グループによって議論が停滞したところがあり、それが数字に表れていると考えられる。提示された課題が、日本語で議論するのも難しいと感じられたことも影響しているかもしれない。

各プログラムについての生徒のコメントをいくつか紹介したい。

各プログラムの評価（5段階）



■オープニング

- ・自分の知らなかった他校についてのことや国際的な様々な活動について知ったことで更にオリンピズムなどについて知りたい・学びたいという気持ちが強くなった。オンラインならではの新しい体験ができよかったと感じた。

■講義①

- ・これまでオリンピックは世界選手権のような競技大会としての視点で見えていたけれどそれだけでない目的もあることを知り考え方が変わった。

■講義②

- ・今、東京五輪 2020 を「開催できるかどうか」に焦点が注がれているが、「そこで何を残すか」が重要なんだ、という言葉に感銘を受けた。そして、何を残すかについて、100 年前の大会から学べることがあるということに驚いたとともに、初心を忘れないことが大事だと思った。

■講義③

- ・おもてなしについて、改めて知ることや初めて知ること、グループワークで実際に自分たちで考えることを通し、日ごろから実践できることが大切だと思った。グループでも話したが、おもてなししようと思ってする事ももちろん大切だが、身近なところで小さなことからでもおもてなしの心を忘れず過ごしていきたいと思った。また、対応ではなく心づかい、おもてなしということが私は心に残った。困っている人などに対し、ただ助けるだけでなく、プラスαの気づかいができてこそのおもてなしだと思った。

■演習①

- ・オリンピックの多くの記念品や展示品を見ることができ、今日の午前中の講義とリンクさせてオリンピックについて考えることができた。また、グループセッションでは、さまざまなバックグラウンドを持って今日集まった私たちの記念になるような活動をすることができて、とても楽しかったです。また、同じものを学んでも、各班ごとに異なる結果として表現されたメダルを見て、今日一日を通してのみんなの考えを知ることができて良かったです。

■演習②

- ・聖火リレーには震災や戦争など忘れてはいけない日本の歴史と深く関連していることを知った。愛知県民として愛知県の聖火リレーを考えることで愛知県の良さを再確認出来た。グループワークでは他県の高校生に愛知県の魅力を知ってもらいたいと思い、主体的に行動するのが楽しかった。
- ・私は名古屋に住んでいるので埼玉のことは詳しくなかったけれど、地方に住んでいる方が色々な観光地を教えて下さって、たくさんの発見があった。
- ・神奈川県に住んでいないので、議論にちゃんと参加できるか不安だったが、「県外に住む人間から神奈川県はどのように見えているか」という立場で議論を進められたと思う。

■演習③（「」内は 5 段階評価）

- ・「5」上手ではないけれど、英語がもともと好きなので話すのがとても楽しかったし、これからは英語の勉強をもっと頑張って自分の意見をはっきりと伝えられるようになりたいと強く思いました。また英語のほうが自分の意見を積極的に伝えることができるなと感じました。今回のユースフォーラムの中で一番楽しかったです。
- ・「5」事前に単語やオリンピックについて色々調べて用意していた英文があったのですが、それには難しい単語や英語独特の表現などを含んでいたのが最初はうまく伝わりませんでした。そこで、難しい表現を簡単な単語で言い換えることをしたのですが、それが工夫したところでもあり、難しいところでもありました。
- ・「5」すごく楽しく交流をすることができました。難しいお題でしたが、英語だったからこそシンプルに考えられたかなと思います。メンバーの意見も新鮮で、面白かったです。短い時間だったので深く話せなかったのが残念でしたが、またディ

スカッションできたら嬉しいなと思いました。

- ・「4」このディスカッションは、正直英語だからというよりは、テーマ自体が難しく止まってしまうことが多いように感じた。
- ・「3」言葉の壁を感じる場面がたくさんあり、話すことができなかったので打ち込むことで意見を出して、単語を拾って理解しようと努めました。英語で思っていることを口に出して表現できることはとても武器になると思った。聞いているうちに理解できることが増え、これまであまり思えていなかった、楽しいという思いが込みあがってきたのですごく良い経験を積むことができました。
- ・「2」自分は電波の環境もあり、言いたいことが伝えられず悔しかったです。周りが話している声は聞こえたのでスライドづくりなど後方に回りましたがそれもうまくできたか不安でした。

■英語での討議のまとめと報告

- ・日本語が使えることでより多く意見交換をすることができ皆でスライドを作り上げられたと思う。最後のグループ活動ということもあり最後には別れを惜しむほど絆を深めることができた。多くの人と関わり沢山の新しい知識を得ることができた活動であった。
- ・英語で伝えられなかった意見や、伝わってるか不安だった意見について、徹底的に討論し、班の意見としてまとめることができた。英語で話していた時は伝わっているか不安だった部分も意外と伝わっていて、自分の英語力以上に人には伝わっていたりするのだなと感じた。また私は討論の最初の頃は、東京オリンピックを開催すべきでないという意見を持っていたが、全体の討論を通して、パンデミックが再度起きる確率よりも、世界が一つになることの重要性の方が高いと思い、開催すべきという方向に意見を変えることができた。このように同世代の仲間の意見を聞き、自分の意見について再度考えることができる機会を体験できて、とてもいい経験になった。

■オンラインエクササイズ

- ・昼だけのスペースでも十分運動ができるんだなと思った。
- ・みんなで一緒に体を動かして、また、違う場所に居ても同じ動きで繋がれて楽しかったです！

■クロージング

- ・各校の代表1名の感想の部分で、他の班の英語ディスカッションの様子を知ることができて、どの班も英語での討論は苦戦したということが聞けたので、少し安心しました。また、スロバキアの高校生が日本について調べ、パワーポイントにまとめてくれているということを知り、東京2020に向けてどれほど、東京や日本が世界から注目されているのかということとを再認識することが出来ました。
- ・最後の中塚先生のお話にあったように、私もオンラインでこんなに充実した学びが出来るんだなと驚いています。けれど直接会って話すことの大切さを忘れないようにしたいと思います。
- ・最後に田原先生がおっしゃっていたことを聞いて、改めてオリンピックを開催する国として日本は今世界中の国々から注目されているのだなと感じました。コロナ禍が収束する、もしくは完全には収まらなくても様々な感染対策を駆使した環境で、安全に大会が開催できるようになるといいなと思いました。

■全体を振り返って

- ・初めてこのようなzoomを使って他の学校の方と交流するプログラムに参加しましたが、二日間本当に充実した時間で、オンラインとは思えない程でした。講座はもちろん、特にグループ活動での交流を通じて、初対面の方とも積極的に自分の意見を話したりグループの意見をまとめたりする力を成長させることが出来ました。大変貴重な経験をさせていただくことができました。ありがとうございました。
- ・このフォーラムを通して、多くの仲間と出会い、来年に迫る東京オリンピックについて当事者意識を持って積極的な討論をできたことで、高校生である私達だからこそ出来ることの多さを再認識することが出来ました。また、ここでの討論や話し合いをこのフォーラム内に収めるのではなく、学校全体、もしくは全国の高校生に発信することが一番大切なのではないかなと思いました。そして、多くの高校生が東京オリンピックのために何かアクションを起こしてくれるようなきつ

かけ作りを私達でできると思います。

- ・朝から夕方と長かったが、適度な休憩時間があったので1つ1つに集中できたし、フリータイムを使って友達を増やすことができた。ここでつながった人達と継続的に関わっていきたい。
- ・二日間という短い時間だったが、このユースフォーラムでは今まで知らなかった様々なことを知識として得ることができ、またオンライン上ではあったけれども同じ高校生とともにオリンピズムや東京2020大会のことを議論し合うことができ、とても充実した濃い時間になったと思う。このフォーラムのことについて学校で募集があったときに、最初は「オンラインで何をするんだろう」という疑問があった。参加を決めてからは英語でのディスカッションがとても不安だったり、事前に配布されていた参加者一覧を見ながら、みんなの頑張っていることや特技などに感心して自分にはこれといったものがないんじゃないかと早くも自信を失いかけていたり、ワクワクしつつも緊張や焦りのようなものを感じていた。しかし実際に参加してみると、講義を聞くことによって知識が増えたとし関心も広がった。

<注>

- 注1) 2年に一度、各国持ち回りで近代オリンピックの創始者の名を冠した「国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム（国際YF）」が開催されている。主催はCIPC（国際ピエール・ド・クーベルタン委員会）。世界中から100名以上の高校生が集い、座学や討議、スポーツ交流やアート活動を通してオリンピズムを学ぶ機会である。日本からは2009年に生徒2名がオブザーバー参加して以来、毎回参加。2015年からは7名のフルメンバーが認められ、参加者選考を兼ねた「国内YF」が、CORE・中京大学・NPOサロン・JOA（日本オリンピックアカデミー）などの主催・共催で開かれるようになった。2021年予定の国際YFへの参加生徒は、本YFで選考される。選考と派遣の母体は、CIPCの日本支部として2019年8月に発足したCIPC（日本ピエール・ド・クーベルタン委員会）である。
- 注2) 嘉納治五郎生誕150年の2010年に発足した筑波大学の学内組織で、日本初のOSC（Olympic Study Centre）としてIOC（国際オリンピック委員会）から認定を受ける。11校ある附属学校を活かしながら「オリパラ教育」事業に先駆的に取り組み、スポーツ庁委託事業「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」をリードする。事務局長は真田久氏。
- 注3) 中京大学で毎年「JOAユースセッション」の名称で、来田享子氏を中心に中高生向けの国内YFが開催されている。今回はオンライン開催となったこともあり、中京大学と筑波大学で連携して取り組むこととなった。
- 注4) スポーツを通しての「ゆたかなくらしづくり」を“志”に掲げるNPO法人。その前身は1980年代のサッカー関係者の研究会にあり、1997年からサロン2002の名称で活動。月例会は今年12月で通算290回となる。2014年にNPO法人化。「オリパラ教育」事業やU-18フットサル事業などに関わる。理事長は中塚義実氏。
- 注5) ギリシャに本部を持つ国際オリンピック・アカデミー（IOA）を頂点とする世界の148（2019年現在）の国や地域にある国内アカデミーの一つ。1978年に設立し2005年にNPO法人化。現在のJOAの中長期目標は「オリンピズムの普及と浸透」で多くの事業に取り組む。国際YF派遣生徒の選考を兼ねた国内YFは、中京大学では「JOAセッション」の名称で開催。
- 注6) 東京都高体連加盟専門部の一つ。都内の高校運動部についての研究を推進するとともに、毎年「東京都高体連研究大会」を主催、部活動のあり方を意見交換する場となっている。2019年12月に都内で開催された「クーベルタン-嘉納ユースフォーラム2019」を主催、「オリパラ教育」への取り組みを開始した。
- 注7) 中京大学内に設置されたスポーツ専門ミュージアム。研究者が収集した資料や卒業生等の関係者が寄贈した資料約7,000点を所蔵。スポーツと社会のつながり、オリンピックの光と影を描き出すことをテーマにしたミュージアム。
- 注8) 田原淳子氏（国士舘大学）が担当。田原氏はCIPCの副会長であり、国際ユースフォーラムの運営にも関わるオリンピック史研究者。
- 注9) CORE事務局長の真田久氏が担当。日本のオリンピック教育を牽引する真田氏は、2019年のNHK大河ドラマ「いだてん」では歴史考証に携わる。「古代オリンピック、100年前のアントワープ1920大会などを通して、オリンピックと疫病はどのように関わりがあったのか」ということを話したい（真田氏）。
- 注10) 筑波大学客員教授の江上いずみ氏が担当。大学や官公庁、企業、医療機関、介護施設などで「グローバルマナーとおもてなしの心」などの講演を手掛けるほか、全国の小中高等学校で「おもてなしの心」をテーマに講演中。今回は演習①

のグループ分け・自己紹介まで行う。

- 注 11) 中京大学スポーツミュージアムの学芸員、中京大学の大学院生 / 学生がサポートして実施。グループ活動ではリモートでメダル作りに取り組むので、紙と色鉛筆・クレヨンなどを各自用意するとよい。
- 注 12) CORE 事務局が主に担当。OVEP (Olympic Values Education Programme) を用いた「オリンピズム」に関するグループワークを行う。演習②③は同一グループ (演習①とは異なる)。
- 注 13) NPO 法人サロン2002 が主に担当。テーマは「コロナ禍において東京2020大会を開催する意義」。概要説明のあと各グループで英語のみの討議。午後はグループ討議の内容を日本語で発表する。
- 注 14) 休校期間中に筑波大学附属高校で行われた「朝体操」(「ブラジル体操」の要素あり)、自由学園女子部で行われた「オンライン体育実技」(「デンマーク体操」の要素あり)を行う。運動着で参加すること。
- 注 15) 課題レポートを提出するところまでが本フォーラム。派遣生徒の選考は、各活動への取り組みとともに課題レポートを評価資料とする。レポートのテーマは当日発表する。

楡葉町立楡葉中学校（福島県）における特別講義

筑波大学体育系、CORE 事務局 真田 久、大林 太郎

2020 年 9 月 23 日（水）、筑波大学（CORE）の真田教授および大林助教が、福島県楡葉町立楡葉中学校（楡葉北小学校・楡葉南小学校と合同）において、「オリンピックと聖火」特別講義を実施しました。各教員と同大学院でスポーツ・オリンピック学を学修する TIAS 留学生らが同校を訪問し、オリンピックと聖火の歴史やギリシャ・オリンピア遺跡に関する講義を行い、その後は留学生と児童・生徒らが協力して「東京 2020 聖火リレー応援メガホン」を作成し、交流活動を行いました。

講義の冒頭、真田教授が IOC のトーマス・バッハ会長から同校に届けられたメッセージを読み上げました。その内容は、日本国内の聖火リレーの出発点となる J-village から程近い同校の児童・生徒に向けて、オリンピックの聖火が、平和、友情や尊敬の価値のシンボルであることを説き、それを日本で最初に迎える皆さんが、その精神を日本中、世界中に届けていってほしいというものでした。そして、真田教授による聖火の歴史と意義に関する講義、大林助教によるオリンピア遺跡や古代五輪に関する説明を行い、聖火リレーのスタート地点にほど近い同校において、児童・生徒とともに学びました。



写真1. 真田教授・大林助教らによる講演



写真2. 留学生との交流：オリジナルメガホン作成

後半には、TIAS 留学生と児童・生徒が協力して「東京 2020 聖火リレー応援メガホン」を作成しました。聖火リレーや東京オリンピック・パラリンピックに向けた応援メッセージを日本語と英語で書き入れて、世界に一つのオリジナルメガホンを完成させました。そこには「コロナにまけるな がんばっぺ!」「あきらめるな 必ず火は灯る!」など聖火リレーの再出発に向けたそれぞれの想いが込められていました。

今回の特別講義は、楡葉町が「復興ありがとうホストタウン」事業を通してギリシャ共和国との交流を行うことになったことが一つのきっかけとなって実現したものです。参加された皆さんが、今後、オリンピック・パラリンピックを通してさらなる国際交流を深められることを期待したいと思います。

2020 横浜スポーツ学術会議 (2020 Yokohama Sport Conference)

筑波大学体育系、CORE 事務局 宮崎 明世

2020 横浜スポーツ学術会議は、東京オリンピック・パラリンピック大会の開催を前に、国際大会として 2020 年 5 月下旬に開催される予定であったが、大会の延期を受けて、2020 年 9 月 8 日から 22 日にオンラインでの開催となった。大会テーマは、「多様な人々が共に生きる世界をめざして：体育・健康・スポーツ科学の貢献」“Contributing to a Sustainable World”で、一般発表はすべて英語ポスター発表として行われた。

この学会に、“The Evaluation of Olympic and Paralympic Education for Tokyo 2020 through student’s questionnaire. -The Nationwide Development project of Olympic and Paralympic Movement for Tokyo2020”のタイトルでポスター発表を行った。発表の概要は以下の通りであった。

本研究では、2018 年度オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業（以下、全国展開事業）の推進校アンケートに回答した、100 校（小学校 60 校、中学校 26 校、高校 8 校、特別支援学校 4 校）の児童生徒を対象とし、その総数は学習前 13,722 名（小学生 6,804 名、中学生 5,207 名、高校生 1,500 名、特別支援学校 211 名）、学習後 12,662 名（小学生 6,084 名、中学生 4,909 名、高校生 1,466 名、特別支援学校 203 名）であった。

全国展開事業では、各学校で展開された活動の成果を明らかにするため、10 項目のアンケート調査を実施している。質問項目はオリンピックに関する 5 項目（オリンピック、パラリンピックに関する興味、オリンピック・パラリンピックにおけるボランティアに関する興味、大会参加に関する興味）と、活動テーマに関する 5 項目（社会の役に立ちたいと思うか、高齢者や障がいのある人と交流したいと思うか、スポーツへの興味、日本の文化や伝統に関する興味、外国の生活や習慣に関する興味）であった。回答は 4 件法で行われた。各校で行われた主な活動内容は、オリンピックやパラリンピックに関する学習、他校種や高齢者、障がい者などとの交流、オリンピック・パラリンピックに関連させた学校行事、アスリートなどによる講演やスポーツ体験などであった。

学校種別に統計処理（対応のない t 検定）を行ったところ、小・中・高では「スポーツをしたり、見たりすることに興味がありますか」という項目以外のすべての項目について活動後に有意な向上が見られた。このことから、児童生徒は活動を通して、オリンピックやパラリンピックに関する興味を高め、活動のテーマについても一定の成果を上げることができたと考えられる。一方、特別支援学校では、すべての項目において有意な変化が認められなかった。特別支援学校には、さまざまな障がい種が含まれており、対象数が他の校種よりも少なかったが、得点が向上しなかった理由を明らかにすることはできなかった。

本研究では、児童生徒に直接質問することで活動の成果を検討し、教育の効果を明らかにした。オリンピック・パラリンピック教育の様々な活動を通して、児童生徒はオリンピックやパラリンピックそのもの、ボランティアで大会を支えること等への興味を深め、教育テーマに関しても一定の成果を上げていることが明らかとなった。新型コロナウイルスの感染拡大を受け、1 年間の大会延期を受けて、教育活動を取り巻く状況が変化し続ける中ではあるが、今後も教育実践を継続し、さまざまな観点からその成果を検証する必要がある。

1. 対象と目標（ねらい）

オリンピックでは、表彰式などで各国の国歌が流れる。その際、各国の国歌に続けて日本の国歌「君が代」が流れると、「ある意味で日本らしさ、その国らしさ」が表れていることを、音楽的な側面から感じることがある。それは音階や速度、ハーモニーなどが関連しているからであろう。その「日本らしさ」に子供が気づき、そして、世界各国の国歌を入口にして、その国に伝統音楽に触れていくことを本実践では目指すものとする。

2. 内容

第5学年の音楽科「世界のいろいろな声の表現や楽器のひびきを楽しもう」の題材の一つに「音楽の旅」がある。題材は、「子守歌→民謡→世界の音楽」という流れで構成されている。今回のオリンピック教育では、先ほど示した題材の中の「世界の音楽」を取り上げることにする。教科書には、インドネシアの「ケチャ」などの伝統音楽が提示されていて、世界各地の声での表現や様々な楽器の響きに親しむ内容である。この題材では、前半に日本の「子守歌」や「会津磐梯山」「こきりこ節」などの民謡に親しみ、その後、世界の音楽に触れていく流れになっている。日本の伝統音楽から世界の音楽へのつながりを考えている点においては、教科書に示されている通りでも「オリンピック教育の一つになり得る」と考えている。しかし、本実践では、これまでの学び方に加えて、「世界の国歌」を組み込むことにした。

3. 成果と課題

(1) 世界各国の国歌鑑賞

授業では、まず表1に示している①～③の国歌から鑑賞した。

その際、授業者として配慮した点は、「これから聴く音楽が国歌であること」を伝えずにいたこと。そして、各国の国歌を音楽的に比較しやすいように、演奏の形態を「歌唱」に揃えたことである。また、鑑賞する前に、「これから聴く曲は、ある共通点がある」ということを伝えておいた。

さて、①を初めて聴いた時、「ロシアのような」「国歌かな」という反応があった。こちらが「国歌」という存在を伝えずにいたが、曲の特徴を捉えて、そのような反応を示したことは興味深い。続いて②のロシアの国歌を聴いた。ロシアの国歌は、冒頭に「ロシア」という歌詞が含まれているので、子供達の反応がさらに興味深かった。「ロシア？」というように…。

④までを聴き終えた後に、①～④のそれぞれの曲の特徴はあるが、大きな違いはないことを共通で確認した。これは各国の国歌がいわゆる西洋音楽の様式をもとにして作られていることが背景にあるからだろう。これに関連して、子供からは「教会の音楽」、「式典や儀式で流れる感じ」、「盛り上がり方が似ている」、という意見も出た。そして、いよいよアメリカ合衆国の国歌を聴く。アメリカ合衆国の国歌「星条旗」は、子供達もメディアなどで聴く機会も多く、「もしかしたら、これまで聴いた曲はすべて国歌かな」と想像し始めていた。ここで、冒頭に示した「ある共通点」が国歌であることに気付いた子は多い。

(2) 日本の国歌「君が代」

7曲目は、日本の国歌「君が代」である。前奏を流すとすぐに、「やっぱり国歌という共通点だった」という声があがった。そこでの子供の気づきは次の通りである。

【君が代を聴いた時の子供の気づき】

- | | |
|-----------------|------------------------|
| ア 一つひとつの音が伸びている | イ 速度（テンポ）がゆっくり |
| ウ 音程が比較的低い | エ 旋律が一つの旋律である（ハモっていない） |
| オ 使われている和音が独特 | など |

表1. 鑑賞の順番

	国名
①	インドネシア共和国
②	ロシア連邦
③	イギリス
④	大韓民国
⑤	中華人民共和国
⑥	アメリカ合衆国
⑦	日本

これは①～⑥の国歌と比較しながら得た子供の気付きと言える。①～⑥の国歌は西洋音楽をもとにしていることがわかる一方で、「君が代」は、いい意味で「日本らしさ」を感じ取ったり、聴き取ったりすることができた。そして、これまで聴いた7曲が国歌であることを伝えた。①～⑥の国名を明かしていく中で、②は歌詞にも示されていた「ロシア」の国歌であることから納得していたが、①の「インドネシア」などは、想像から大きく外れたようであった。

(3) 世界の伝統音楽を鑑賞

題材の終盤に、教科書に示されている世界の伝統音楽を鑑賞した。ここでは、インドネシアの「ケチャ」、イギリスの「バグパイプ」、アメリカの「ゴスペル」を主に取り上げた。この3つは、その国の国歌も鑑賞しているので、それと比較しながら聴いている姿が見られた。アメリカの「ゴスペル」は、国歌の雰囲気と近いという感想を持ったようだが、「ケチャ」や「バグパイプ」は、国歌の雰囲気とは異なるという感想を持つ子が多かった。言い換えると、その国々に伝わる伝統音楽の特徴を捉えながら聴くことができたということである。

4. 今後の予定

今年のオリンピックが予定通り開催された際には、表彰式などで流れる国歌に改めて注目して聴くことを伝える。そして、興味深かった国歌、印象に残った国歌などを授業などで共有する場を設ける予定でいる。



写真 1. 鑑賞 CD「世界の国歌」(歌唱編)



写真 2. 授業の様子

オリンピック・パラリンピックと SDGs を関連づけた授業実践

附属小学校 横山 みどり

1. 対象と目標（ねらい）

第6学年家庭科題材（「オリパラ×SDGs」～広い視野で生活をみてみよう～）

2. 内容

(1) 題材について

本題材は、内容C「消費生活・環境」(2) 環境に配慮した生活にあたる。また、6年後半での実践ということから、自分の生活と世界の人々との生活とを比べて考えることで広い視野をもち、中学での学びにつなげていくこともねらいとした。さらに、SDGsを問題意識の視点として働かせることで、オリンピック・パラリンピックについて興味があることを調べるだけにならないよう展開を工夫した。

(2) 指導計画（全4時間）

	小題材名（時間）	活動内容	備 考
1	広い視野で生活をみてみよう (2)	① DVD 資料「世界の果ての通学路」の最後を改めて視聴して質問に答える。 Q, 映像の子どもたちにあって、私たちにはない、少ない物は何か？ ② 世界的な大会オリンピック、パラリンピックから連想する「衣・食・住・その他」を出し合う。 ③ 自分が興味をもったことについて、図書室で調べるなどして課題を決める。	○視聴済。内容：想像を絶する道のりを通学している子どもたちのドキュメンタリー ○オリンピズム、選手村、難民選手団などの事柄を例に挙げ、広く連想させる。 ○問題意識をもつ視点として、SDGsを思い起こさせる。
家庭学習		自分の課題について更に調べたり自分の生活と比べたりする	
2	調べよう・まとめよう (1)	④ 課題について調べたことや自分の考えを、パンフレットや新聞にまとめる。(写真1、2)	
3	私が考える「オリパラ×SDGs」 (1)	⑤ パンフレットや新聞を見合い、感じたことを付箋に書いて伝え合う。 ⑥ 友達との交流で感じたことや、これから自分が取り組みたいことをノートに書く。	○オリンピック、パラリンピックがより楽しみになる交流にしようと提案する。 ○パンフレットや新聞の、内容に注目させる。



写真1. オリパラ新聞



写真2. 付箋を使って交流

(3) 指導の実際

学習内容①

「学びたい」という強い気持ちをもって遠い道のりを学校へと向かうこと
もたちの姿から、物質的に恵まれている自分たちの社会にも、課題があること
に気付けたようであった。「具体的な夢をもって努力していることがすごい」
「人に親切にするチャンスが僕たちより多いんじゃないかな」「地下水を掘りあ
てられたり馬を乗りこなせたり、いろんな能力が私たちより高い」などの意見
が出された。

学習内容②

衣食住などが集まっている場所として「選手村」を教師からは例としてあげ
た。また、オリパラと同じく世界的な取り組みである SDGs の問題意識をもつ
視点とするよう促した。すると子どもたちから多くの意見が出され、活発に話
し合いが行われた。

—子どもたちから出された意見の例—

衣：種目に合ったウェアの開発、開会式の衣装、観戦する時に適した服装

食：アレルギー、宗教や文化の違う人が一緒に食事をする、アスリート
の食生活

住：生活文化の違う人が一緒に生活すること、選手村にはどんな施設がある
のか

その他：難民選手団、オリパラを楽しむ方法、練習したくてもできない人がいる状況

学習内容③

自分が問題意識をもって、オリンピック・パラリンピックについて調べた経験に加え、友達の調べた内容や考えにふれたこ
とで、新たな願いや目標をもてたようであった。「オリパラがアスリートだけの活躍の場ではないことが分かった」「東京で開
催されるオリパラが前よりも楽しみになった」などの意見が出された。

3. 成果と課題

問題意識をもつ視点として SDGs と関連づけたことは、課題が明確になり子ども同士の交流が活発に行われることにも効果
があった。しかし、限られた時間数の中で課題の追求に十分な時間がもてないことは、今後の実践課題として残った。

4. 今後の予定

東京オリンピック・パラリンピック後に本題材を振り返り、指導を修正したい。また、本題材を家庭科の他の題材と関連づけ
ることを検討したい。

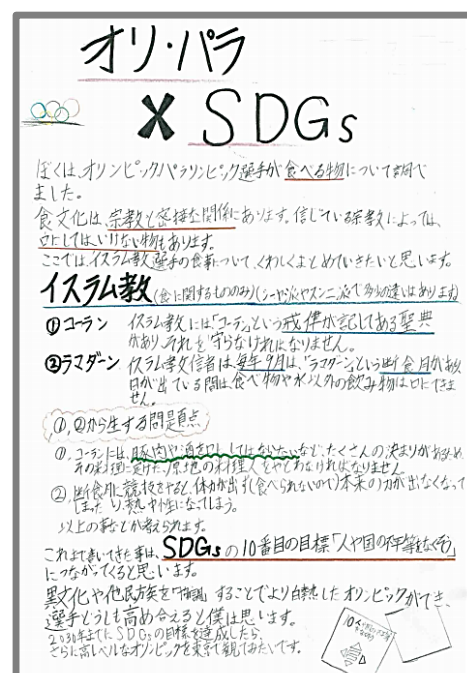


写真3. 児童が制作したパンフレット例

オリンピック・パラリンピック教育の多様性に関する取組

附属中学校 秋山 和輝

1. 対象と目標（ねらい）

2020年東京オリンピック競技大会、パラリンピック競技大会を控える中で新型コロナウイルス（COVID-19）の感染拡大に伴い、東京オリンピック、パラリンピック競技大会は1年間の延長を余儀なくされた。本校の学校教育においても甚大な影響を受け、分散登校、時差登校を実施した。授業時数の確保の面から教育課程内の内容と関連したオリンピック・パラリンピック教育の充実が図れない状況であった。そこで今年度は総合的な学習の時間をオリンピック・パラリンピック教育の中心となる活動の場として捉え、2年生と3年生の学習を紹介することとする。また、対面による講演会や大規模な集会等は感染予防の面から実施できない状況が続いた。生徒の調べ学習及び探究活動を充実させるため司書と連携を取りながら図書の充実化を目指した。十分な活動ができない中で生徒たちは何をみて（体験して）、何を学び、何を今後に生かすのかなど学習の記録を中心に本校の取り組みを紹介する。

したがって多種多様なオリンピック・パラリンピック教育を展開することを本実践の目的とした。そのための各取り組みを以下のように設定した。

- (1) 2年総合的な学習の時間の活用
「オリンピック・パラリンピックのする、見る、支える、知る」
- (2) 3年総合的な学習の時間の活用「パラリンピックに学ぶ多様性」
- (3) オリンピック・パラリンピック関連図書の充実化

2. 内容

(1) 2年総合的な学習の時間の活用

「オリンピック・パラリンピックのする、見る、支える、知る」

体験を通してオリンピック・パラリンピックの学習を深める活動を実施した。「する」ではオリンピック競技種目もしくはパラリンピック競技種目を実際に行き、その活動で感じたことや考えたことを共有する活動を実施した。「見る」では日本オリンピックミュージアムに足を運び、現地でしかわからないことを経験させた。「支える」では東京オリンピック、パラリンピック競技大会を支える方々の立場から考える機会とした。「知る」では自分のテーマに沿って調べ学習を行った。以上の4点で詳しく実践を紹介する。

①「する」活動

オリンピック・パラリンピックの競技種目をグループごとに調べ、紹介し、実施する活動を行った。用具や施設の都合で今年度の取り扱う種目はラグビー、フィールドホッケー、ボッチャ、ゴールボール、ブラインドサッカー、シッティングバレーとした。パラリンピック競技種目の正規ルールでは活動を楽しめないことが懸念されたので特別ルールを生徒が考え、生徒全員が安心、安全の上で楽しむためにはどのようにルールやコートサイズを修正すればよいかをグループ内で真剣に意見を出し合っている姿が印象的であった。

②「見る」活動

スポーツ、文化をテーマとした展示を中心に見学し、オリンピズムに触れるだけでなく、スポーツや芸術の融合やオリンピアンたちの情熱を感じる機会として計画した。日本オリンピックミュージアムに足を運ぶことで現地ではしか得られない学びを生徒には感じてほしいと思った。実際に見学すると日本オリンピックミュージアムでしか見られない貴重な資料だけでなく、体験型の学習もあり、生徒の興味関心に合わせて主体的に学びを深めていた。当日は生で聖火が見られるとのことで生徒に事前学習を行った。また日本オリンピックミュージアムに行くまでには新国立競技場が見えるので外観だけではあるものの競技場を実際にみる機会に



写真1. ミュージアム内で主体的に学習に取り組む姿

もなった。実施日や見学場所は以下の通りである。

日時：令和2年10月29日 木曜日

場所：日本オリンピックミュージアム 〒160-0013 東京都新宿区霞ヶ丘町4-2

③「支える」活動

オリンピック、パラリンピック選手本人はもちろん家族やコーチ、会場の運営者、建設者、ボランティアなど大会には様々な人が関わって成り立っていることを伝えた。その中でも和泊町役場吉成さん、三陸鉄道金野さん、ブルーインパルス隊長2等空佐福田さんのインタビュー動画を基に学習を進めた。事前には大会を「支え」ている方へのインタビューを企画していたが新型コロナウイルス感染拡大に伴い、オンデマンドの動画を活用して学習を進めるに至った。学習を進めていく過程で多様な職種の様々な方が関わっていることを理解している様子が窺えた。

④「知る」活動

上記の様々な活動を通して個人でさらに考えを深めたい内容を決めて、各自で調べる時間を設定した。教室内ではタブレットPCを使用し、必要に応じて自由に図書室に行けるように探究学習の時間とした。最終的に各自でレポートとして学習をまとめ、そのレポートを基に発表活動を行った。



写真2. 生徒の課題レポート

(2) 3年生総合的な学習の時間の活用「パラリンピックに学ぶ多様性」

様々な障がいのあるアスリートたちが創意工夫を凝らしながら限界に挑むパラリンピックに焦点を当て、多様性を認め、だれもが個性や能力を十分に発揮できる公正な機会を与える場が必要である。「互いに尊敬し支え合う共生社会」をテーマにパラリンピック教育の充実を図った。「パラリンピックの精神」、「スポーツ」、「文化・交流」、「環境」のテーマから社会の様々な事象における理想や課題に気づき、その実現や解決に向けて調べたり、話合ったり、熟考しながら「多様性」の理解を深めていく。その後、各自の研究テーマに沿って、考えを深め、論文にまとめる作業を行った。障がいのある方への理解から実際にシッティングバレーなどスポーツを体験する活動を通して中学生の視点だけでなく、障がいのある方の視点や競技している選手の視点など多角的に捉えることや感じたことや学んだことを自らの言葉で表現し、仲間に伝える活動を中心に行った。

(3) オリンピック・パラリンピック関連図書の充実化

オリンピック・パラリンピック教育だけに留まらず、生徒の興味関心に対応した活動を保障できるようにオリンピック・パラリンピック関連図書の充実化を図った。東京オリンピック、パラリンピック競技大会を控えている中で司書と連携をとり、オリンピック・パラリンピック特設ブースを設置した。生徒が手に取りやすいようにレイアウトを工夫し、関連本をまとめるなど配置にもこだわった。生徒は総合的な学習の時間の調べ学習の時間だけでなく、休み時間や放課後に生徒が手に取って見ることができた。次年度はさらに図書委員会とも連携をとり、さらにたくさんの生徒がオリンピック・パラリンピックの本を読む機会が増えるような取り組みを計画していきたいと考える。



写真3. 図書館のオリ・パラ特設ブース

3. 成果と課題

コロナ禍で十分なオリンピック・パラリンピック教育ができなかったことは事実であるがそのような状況下でも生徒に何を伝えることができるのか考えさせられた1年であった。今年は全校または学年単位での取り組みは実施できなかった。

4. 今後の予定

本校のオリンピック・パラリンピック教育のさらなる発展を考えた時に岡田ら（2020）の指摘のようにオリンピック、パラリンピックの実技指導を活かした授業モデルや地域の障がい者スポーツ協会との連携、教員研修の充実などを参考に今後取り組みたいと考える。新たな生活様式が言われている中で新たな学校生活、新たなオリンピック・パラリンピック教育も同様に検討し、進化、発展、そして再構築していく必要があると感じた。

<引用参考文献>

岡田悠佑・友添秀則・深見英一郎・吉永武史（2020）教員の視点から見たオリンピック・パラリンピック教育の促進方法に関する研究：実践内容と関連付けた効果及び課題の検討を通して．スポーツ教育学研究，40(2)：31-50.

附属高等学校の取組

附属高等学校 鮫島 康太

1. 対象と目標（ねらい）

日々の授業や学校行事、部活動等、学校における教育活動全般にわたって「オリビズム」を学ぶ姿勢は、嘉納治五郎校長の頃から本校が取り組み、いまでも受け継がれている。しかしながら、2020年度は新型コロナウイルス感染症の影響により、通常の形とは異なる形式での学習活動を余儀なくされた。スポーツ活動に不可欠な「時間、空間、仲間」という条件設定が困難ななか、学校全体で試行錯誤をしながらその時々での社会の情勢に合わせた形で各教育活動を行なった。

2. 内容

(1) スポーツ大会の実施

実行委員会は6月中旬からスポーツ大会実施に向けて動き始めた。体育の授業や部活動に関しても多くの制限がかかり、そして先の読めない情勢の中、日程や種目、ルールの変更などについて様々な議論を重ね続け、10月14日・15日の実施に至った。具体的な変更点は、例年3学年同時に二日間で行うものを、学年ごとに半日ずつとしたこと。種目を「バスケットボール、サッカー、バレーボール」から、人の密集性や競争意識の高まりすぎない「アルティメット、ドッジボール、バレーボール」としたこと。また、更衣場所や応援方法など様々なルールを定め周知し、教員とも協力し合いながら行えたことが挙げられる。



(2) 体育理論の授業において

本校では「保健」の授業においても体育理論分野に触れ、そのなかではオリパラに関する内容も取り扱っている。今年度は年間授業数のうち約半分の授業がオンデマンド型の映像配信となった。オリパラに関する内容としては、古代・近代五輪やその歴史的背景、政治やメディアとの関連など様々な分野について紹介し、生徒同士でディスカッションを重ねるというもの。後期の授業では「2021年の夏にオリンピック・パラリンピックは開催できるのか」という問い提示し、生徒同士でディスカッションを行った。

(3) 「クーベルタン - 嘉納ユースフォーラム 2020」への参加

12月25日・26日にオンライン形式で行われたフォーラムに、本校から3名の生徒が参加した。その中から1名が2021年国際ピエール・ド・クーベルタンユースフォーラム（開催延期）に日本代表チームとして参加することが決定した。

3. 成果と課題

- (1) 参加した生徒の事後アンケートの回答として、「外出自粛期間は運動不足であったが、スポーツ大会に参加してスポーツの楽しさや仲間と共に過ごすことの価値を実感した」というものがあり、多くの生徒がスポーツの価値を再確認できたようである。

- (2) 生徒の意見はウェブ上の評論家の意見と類似したものが多いのだが、時間を重ねるにつれてこの問題を身近に捉えるようになり、自分たちのイベント（文化祭など）と重ねて考え、開催実施のための抜本的な改善案を提示する生徒もいた。この問題を通してオリンピズムの理解が深まるだけでなく、様々な社会問題を自分ごととして捉え、自分の考えを構築するきっかけとなってくれればと思う。

筑駒のオリンピック教育

附属駒場中・高等学校 登坂 太樹

1. 対象と目標（ねらい）

(1) 対象：

- ①オリンピック種目の実践とその効果 中学1年生～高校3年生
- ②オリンピックの成り立ち 高校1年生
- ③オリンピック講演会 中学1年生～高校3年生保護者

(2) 目標：

①オリンピック種目の実践とその効果

ボッチャを実践し、種目そのものに触れる機会を設ける。

②オリンピックの成り立ち

古代オリンピックの成立過程をたどり、その意味合い、衰退原因などを知り、近代オリンピックの意義を考える。

③オリンピック講演会

柔道杉本美香氏を招聘し、柔道を始めたきっかけ、オリンピック出場までの道のり、オリンピック大会当日の話を聞き、オリンピックを体験した人からしか聞けない話を聴講しオリンピックについて考える。

2. 内容

(1) オリンピック種目の実践とその効果

2021年2月6日に中学3年生を対象にボッチャ・ベタンク体験会を実施した。このボッチャ・ベタンクはオリパラ事業予算にて購入したものを使用した。生徒はそれぞれ2チームに分かれて実施、正規のルールに則り行った。ボッチャでは最初はその柔らかさや、特殊な転がり方などに苦戦をしていたが、ゲームが進むうちに戦術的な面にも目を向けられるようになってきた。



写真1. ボッチャの様子①



写真2. ボッチャの様子②

(2) オリンピックの成り立ち

11月17日、高校1年生の体育理論で古代オリンピック以前の各地で行われた運動競技の解説を資料を交えながら行う。古代では運動がどのように捉えられていたのか。各地で行われた運動競技の種目の内容、入賞した際の副賞の多彩さなどを学ぶ。そして古代オリンピックの成立を知り、その衰退原因を考える。また映画『ベン・ハー』の戦車競技を視聴し古代の気分を味合う。

(3) オリンピアン講演会

ロンドンオリンピック女子柔道銀メダリストの杉本美香氏を招き『柔道杉本美香氏と考える オリンピック・パラリンピック』と題して講演をしていただく。杉本氏は以前、本校で保健体育の教育実習を経験されている。今般の社会情勢を鑑みてオンライン開催とし、生徒・保護者の希望者が参加しました。柔道を始めたきっかけ、親御さんや周りの人たちの支え、試合への臨み方、



写真3. 柔道杉本美香氏

選手村の様子などオリンピックに出場した人しか語れない内容だった。

3. 成果と課題

(1) オリンピック種目の実践とその効果

初めてポッチャのボールに触れる生徒が多く、テレビなどで、ゲーム自体は知っているものの、ルールまですることができてとても工夫して行っていた。終了時刻を過ぎても、行いたがる生徒が多く、時間の許す限りポッチャの魅力を楽しんでいる様子であった。

(2) オリンピックの成り立ち

生徒の感想として、次のような評を得る。

- ・古代オリンピックも休戦をもたらすものであったというが、競技自体はなかなかバイオレンスなものだと思う。
- ・昔の人でもまた高い理想を持っていたことが分かった。個人的には、戦車競走で悪知恵を働かせたほうが敗北したことが印象に残っている。
- ・今日の授業の中で習った葬祭競技の賞品の中に釜があり、それはトロフィーのようなものであるという話があったが、この時代から賞品としてのトロフィーという概念があったのは驚きでした。また、オリンピュア競技祭で一般種目と少年種目に分かれているところに、現在に通ずるものを感じました。

(3) オリンピアン講演会

参加者の感想としては、

- ・とてもにこやかで話を聞いているうちになごみました。(高校生)
- ・温かく前向きなお人柄が伝わる楽しい講演会で、あっという間の1時間でした。(中学生)
- ・人を笑顔にする力のある方だと思いました。(保護者)

4. 今後の予定

次年度でも本年度と同様の内容を実施する予定である。

筑波大学附属坂戸高等学校実践報告

附属坂戸高等学校 藤原 亮治

1. 対象と目標（ねらい）

全生徒がスポーツの持つ豊かさを多面的に探究するなかで、生涯にわたりスポーツや身体活動を、自己および自己を取り巻く社会の中で、主体的かつ効果的に活用できるようになるためのスキルを身につける。

2. 内容

(1) 附属特別支援学校とのスポーツ交流学習

今年度から特別支援学校とのスポーツ交流学習を2校で実施した。オンラインでの開催で直接的な接触のない中での交流は、生徒に改めて人と触れ合う大切さや、理解を深めるうえでの言葉以外の情報の大切さを理解したようである。持続的な授業のありかたにむけ、地元学校や学童との協働も計画にあったが実施ができなかった。引き続き開催に向け努力していく。

①オンライン出前講座「スポーツを使った人々と世の中の繁栄」の開催

オタワ大学博士課程に在籍していた木下敬太氏（現早稲田大学助教）に上記テーマで講演していただき、スポーツとは一体どういうものなのかについて見識を深めた。競技スポーツの一面性にばかり目が向いていた生徒たちの見方を広げるうえで貴重な機会となった。

②オンラインでの「ゆるスポーツ」体験

ゆるスポーツ協会の澤田氏にご協力いただき、今後のスポレク交流の参考になるように講演会と体験会を開催した。オンライン上でもテクノロジーを用いることで「運動弱者」としての自分の環境を改善できるという大きな学びとともに、楽しむスポーツを創造するうえでのヒントをたくさんいただいた。

③大塚特別支援学校とのオンラインレク交流

考案したオンラインレクスポを実施し、それぞれのグループで意見交換を行った。

④桐ヶ丘特別支援学校とのオンラインレク交流

オンラインレク交流を実施、改善点などをディスカッションした。



写真1. オンライン講義の様子



写真2. ゆるスポーツ講演の様子

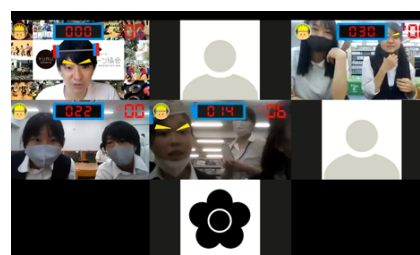


写真3. ゆるスポーツ体験の様子



写真4. 大塚との交流①



写真5. 大塚との交流②

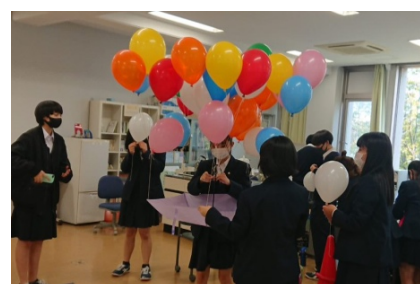


写真6. 道具の製作

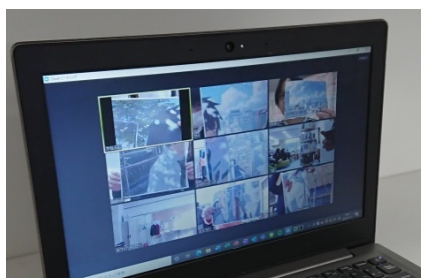


写真7. 桐が丘との交流①



写真8. 桐が丘との交流②



写真9. 桐が丘との交流③

(2) クーベルタン - 嘉納ユースフォーラム 2020 参加

2名の生徒が参加した。そこでの活動や仲間に触発されその後フォーラムの活動の様子などを報告書にまとめ、HPに掲載したり、各種イベントに積極的に参加するなどまなびの意識が向上した。

(3) e-SPORTS によるクラスマッチの開催

株式会社 KONAMI 様に協力をいただき、2学年のクラスマッチ&レクリエーションとして e-SPORTS を実施した。運営にはこうしたイベントに興味のある1年生有志を募り、イベントをサポートするプロの方から指導を仰いだ。コロナ化において、スポーツ大会における「する・みる・ささえる」を体験しながら、スポーツとの継続的なかわり方やオリンピックやパラリンピック大会を考える機会になった。また、決勝戦後はエキシビジョンマッチとして e-SPORTS アジアチャンピオンとの対戦もあり、その卓越した技に歓声が上がった。



写真10. エキシビジョンの様子



写真11. 運営の様子

(4) 教育実習生による選択体育「アダプテッドスポーツ」の実施

本校では3年生の選択体育で「アダプテッドスポーツ」「ニュースポーツ」を実施し、社会体育で活用可能な幅広いスポーツと、多様な人と関わるうえでのスポーツの持つ可能性に関して理解を深めている。教育実習期間に行うことで既存のスポーツ教材から視野を広げる機会として、実習においても非常に効果的に機能している。

3. 成果と課題

コロナ禍での活動となり多くの制限があったことで当初の予定を大幅に変更することが余儀なくされた。しかし、オンライン上において幅広く多くの人から情報を得ることのハードルが下がったことで今後よりダイナミックな交流や学習計画も可能になるように思う。

今回の活動においても、経験した生徒が教育課程内の学習を飛び出し、スポーツ活動を社会参画のツールとして活用する生徒が毎年複数名出てきている。また、スポーツを通じた多様な人との交流から、オリンピックの本来的な意義と現代社会における課題をとらえ、幅広く対話する様子も見受けられた。

課題としては、非接触での交流であったことで、多様性を経験し、捉えなおすには共同学習者の情報が乏しくなったことだ。スポーツが有する接触型・非言語型コミュニケーションから得られる豊かな情報をもっと身近に得るための学習環境整備は今後も継続して検討していく。

附属視覚卒業パラアスリートの協力によるオリンピック・パラリンピック教育の推進

附属視覚特別支援学校 山本 夏幹

1. 対象と目標（ねらい）

今年度の実践は、東京パラリンピックへの出場内定が発表されている本校を卒業した4名のアスリートをゲストとして迎え、本校中学部・高等部生徒がアスリートに対してインタビューを行うという授業を中心にオリンピック・パラリンピック教育（以下「本教育」という。）の目標（①自他共栄の精神を育み、共生・共助の社会の実現に向けた資質の向上 ②オリンピック・パラリンピックへの興味関心の向上 ③スポーツに主体的に取り組む態度やボランティア活動に積極的に参加する姿勢を育む）を達成することを目的とした。

2. 内容

中学部2年生及び高等部普通科・音楽科1年生（以下「高等部1年生」という。）の生徒を対象に「古代オリンピック・近代オリンピックの歴史」や「オリンピックの中で培われてきた文化」に関する概論、「パラリンピックの歴史」や「本校を卒業したパラリンピアン」等について学習した。オリンピックやパラリンピックはスポーツ分野のみならず、多様な分野に影響を与え、我々の生活にも密接に関わっていることを知り、オリンピック・パラリンピックやスポーツに対する興味関心を高めることを目標とした授業を5時間実施した。

東京パラリンピック出場内定を獲得している「競泳男子 木村敬一選手・ゴールボール女子 天摩由貴選手・柔道男子 73kg 級 永井崇匡選手・ゴールボール男子 信澤用秀選手」にご協力いただき、インタビューを行った。中学部2年生は木村選手・天摩選手に対して Zoom を用いてインタビューを行った。生徒たちからは「競技活動を通して得た教訓」「現役アスリートとして SNS とどのように向き合っているか」などの質問があった。高等部1年生は永井選手・信澤選手に対して本校体育館にてインタビューを行った（新型コロナウイルス感染症の対策を講じて実施）。生徒たちからは「競技をはじめたきっかけや魅力」「初めて日本代表選手として世界で戦った時の感想」などの質問があった。生徒たちの質問に対して、これまでの競技生活の中で感じてきたことや関わってきた人たちから受けた影響などを具体的なエピソードとともにお話しをしていただいた。それぞれの年代に応じたお話しをしてくださり、木村選手は将来のことを考えることも大切であると前置きをした上で「中学2年生という瞬間も今しかない。今この瞬間を思い切り生きることが何よりも大切」と生徒たちにメッセージをいただいた。信澤選手は「苦手なことや不得意なことにもチャレンジしてみることで、今まで気づかなかったことに気づいて自分の世界が広がる」と語り、エールを送った。

また、本教育の趣旨に共感いただき、本校卒業生でパラリンピック競泳男子日本代表として通算 21 個のメダルを獲得し、現在は日本パラリンピック委員会委員長である河合純一氏にご協力いただいた。アスリート達の力強い言葉を受け、ご自身も一人の卒業生として、在校生やこれから本教材を通して学ぶ児童・生徒に向けたメッセージをいただいた。

3. 成果と課題

アスリートへのインタビューを実施した中学部2年生及び高等部1年生の生徒に対し、スポーツの「する・みる・支える・調べる」の観点を参考に、オリンピック・パラリンピックに対する興味関心や歴史等についての考えや理解度を測るために1時間目と最終の授業でアンケートを実施した。

高等部1年生を対象としたアンケート結果の一部を抜粋し、表1～3に示した。オリンピック・パラリンピックに対する興味関心については中間層の生徒たちの興味関心を引き上げることができた。また、世界で活躍する卒業生との交流がパラリンピック選手を目指すきっかけの一つとして効果があることも示唆された。自由記述ではパラリンピック選手に対して「全く違う世界の人間だと思っていました」と述べた生徒もいたが、今回ご協力いただいたアスリート達の中には中学・高校年代から本格的に競技を始めた選手がいることや、大会や試合に臨む選手たちの気持ちに生徒たちが共感できる部分があり、これまでより身近な存在になったと述べる生徒もいた。

本教育ではアスリートに対するインタビューという授業を中心に据えた。自ら考えた質問をアスリートへ投げかけ、直接アスリート達から言葉を届けてもらうことで、日ごろの学校生活での過ごし方や将来の目標設定などについて多くの刺激を受けたことがうかがえる。

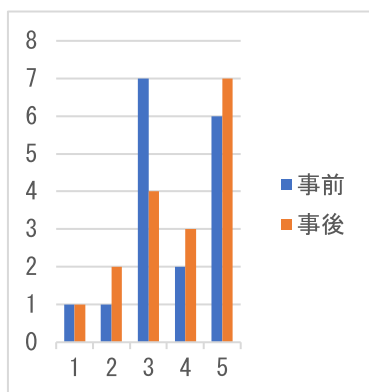


表 1. オリ・パラへの興味関心

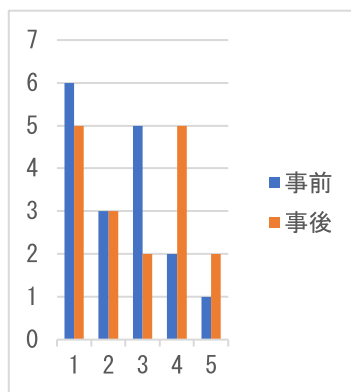


表 2. パラ選手になることへの関心

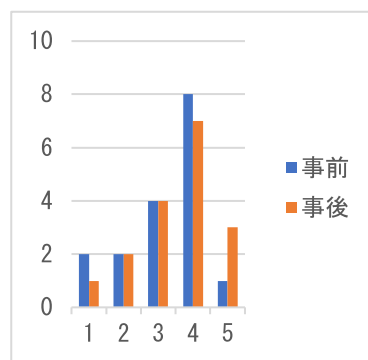


表 3. オリ・パラに関連する仕事やボランティアへの関心

4. 今後の予定

今後の展望としては、本教材を活用して生徒のオリンピック・パラリンピックに対する関心を継続して高めることや競技を始めたいと思った生徒にとって障壁になりやすい環境面について改善できるよう取り組んでいきたい。また、それぞれのアスリートへのインタビューの様子をまとめた映像を教材として活用できるように編集し、「筑波大学 特別支援教育 教材・指導法データベース」へ提供する。

附属聴覚特別支援学校におけるオリンピック・パラリンピック教育の取組

附属聴覚特別支援学校 岡本 三郎

1. 対象と目標（ねらい）

本校でのオリンピック・パラリンピック教育は幼稚部から専攻科の各部各科において幼児児童生徒の実態に即して行われている。今年度は12月に専攻科生対象に「車いすバスケットボール」の特別授業を行った。しかし1月に予定していた中学部生対象の「ラート運動」は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大による緊急事態宣言発令により実施することができなかった。今回は、専攻科造形芸術科・ビジネス情報科における「車いす」の取り組みを報告する。

2. 内容

(1) 専攻科2科共通科目「社会生活」の中に「社会福祉と行政の支援」という単元があり、ボランティア活動について扱っている。その中の一つの授業では、実際に車いすに乗り、坂や段差などを体験している。写真1は、最初に一人で段差を経験後、後方の生徒が介助をすることでスムーズに移動できることを体験する様子である。介助者が車いすに乗っている人の同意を得ず勢よく車いすを押したり、急に段差を超えようとするなど車いすに乗っている人に恐怖感を与えてしまう。大切なのは介助者が車いすに乗っている人の気持ちにたち介助することであるが、授業を通してそのことに気がつく生徒はとて多い。

(2) 神奈川工科大学車いす整備サークルが中心となり他大学の学生や高校生が集い、「空飛ぶ車いす」支援事業（高価な車いすを購入することができないアジアの子供たちに中古の車いすを整備してプレゼントをする活動）に本校専攻科2科も2012年から参加している。新型コロナウイルス感染症の影響で昨年度と今年度は実施できなかったが、2017、2018年は本校を会場に車いす整備を行った。2018年には実際に整備した車いす7台を本校専攻科の台湾研修旅行に持参し、台湾の基隆市輔具資源中心へ寄贈した。なお整備内容は、車いすの車輪部のベアリング調整、清掃、グリス注入などの軸調整を中心に根気のいる作業を大学生や高校生、本校専攻科生が混合グループを組み、iPadの筆談アプリを使うなどしてお互いのコミュニケーション方法を工夫しながら取り組んでいた。

(3) 12月10日（木）、「令和2年度オリンピック・パラリンピック教育活動」の一環として、専攻科生23名を対象に、車いすバスケットボール講演・体験会を行った。3年連続になるが、東京都車いすバスケットボールチーム「NO EXCUSE」所属・橘貴啓選手にお越しいただいた。講演会では橘選手ご自身の経験談や、車いすバスケットボールのルールについてクイズ形式で説明があり、専攻科生も熱心に聞き入り、大きな関心を寄せていた。専攻科生は(1)(2)の取り組みにもあるように、通常の車いすに乗る経験はあるが、車いすバスケットボール用の車いすに乗るのが初めての生徒が殆どだったため、車いすの操作の仕方を一通り学んだ後、小学生用のバスケットボールを利用しシュート練習を行った。最初は車いすやボールの扱いに戸惑いながらも、しだいに慣れてくると車いすを操り、走らせてシュートを打つことができるようになった。シュートが入ると生徒達の大きな歓声が上がリ、夢中で練習に取り組んでいた。その後約1時間を使い、実際にゲーム（写真3）を行った。



写真1. 段差を経験



写真2. 講演会の様子



写真3. 生徒同士のゲーム

5対5のゲームの中で橘選手には生徒に対し適宜アドバイスを送っていただいた。最後のゲームは橘選手1人対生徒10人で行った。短い時間だったが、橘選手のオフェンスを誰も止めることができず一方的な試合運びとなった。生徒達は笑顔で清々しい顔をしていた。以下に、車いすバスケットボール体験後の生徒の感想を一部紹介する。

- ・車いす同士がぶつかりそうで怖いイメージが強かったが、車いすバスケットボールを楽しんで体験することができた。
- ・通常のバスケットでさえ難しいのに車いすバスケットは本当に難しかった。橘選手は日々練習を積み重ねたのだと思う。
- ・以前、車いすバスケットボール選手の試合を見た時、予想以上のスピードでびっくりしたことがある。今回橘選手対生徒10人で試合をしたが、橘選手一人だけバイクに乗っているように速く、カーブもストップも綺麗だった。追いつくこともできず悔しかったがすごく楽しかった。
- ・障がいがある人も健常者も分け隔てなく楽しめる素敵なスポーツなのでこれからもっといろいろな人に親しまれて欲しい。
- ・車いすバスケットボール用の車いすはハンドリムが細く、握りやすく操作しやすかった。橘選手はとても筋肉質でこれがアスリートなのかと思った。シュートの軌道も美しく驚きを通り越し感心した。機会があれば車いすバスケットボールの試合を観戦したい。自分でもプレーしてみたい。

3. 成果と課題

専攻科の生徒は通常の車いす体験や車いす整備などを行っているため車いすに対する知識が高く、車椅子バスケットボール講演・体験会はとても充実したものとなった。講師の先生を一人のアスリートとして捉え、試合の観戦や生徒個人として競技に参加したいなど車椅子バスケットボールを障がいの有無に関わらず誰もが楽しめるスポーツとして認識することができた。また努力を継続し自分を磨くことの大切さなどの心理的な成長もみられた。そしてパラアスリートとしてプロが存在することなどの実社会を自然に受け止めることができた。今後は生徒が卒業後の社会の中でどうパラスポーツに関わるのが課題である。



写真4. 講演・体験会後の集合写真

オリンピック・パラリンピック教育に関する取り組み

附属大塚特別支援学校 山口 裕紀子

1. 対象と目的（ねらい）

本校では、2016年度よりオリンピック・パラリンピック教育を本校の重点プロジェクトとして位置づけ、幼稚部から高等部までの全校が集う全校集会や総合的な探求の時間などの学習にオリンピック・パラリンピックの教育に取り組んでいる。今年度取り組んだ内容（1）全校集会での取り組み、（2）アスリート交流（製菓交流会）とし、以下に報告する。

（1）全校集会での取り組み

「大塚オリパラデー」とし、知的障害のある幼児児童生徒に、2021年に開催予定である東京オリンピック・パラリンピックへの期待が持てるよう「オリンピック・パラリンピックの精神」「スポーツ」「文化」「環境」の4つのテーマに沿って、知的障害のある生徒にも分かりやすい学習を実施することとした。

（2）アスリート交流（製菓交流会）

高等部では、アスリート交流会の中で①自分と違う分野や生活を知ること②選手からの助言を今後の生活や学習への参考とすること③仲間と協力して交流会の運営を行うことの三つをねらいとして取り組んでいる。これまで多くのアスリートから様々なことを教えて頂いた大塚の生徒達が、アスリート達へ何かできる方法はないかと考え、職業家庭で取り組んでいる製菓を「お菓子作りの工程をアスリートへ伝える」として一緒に取り組むこととした。

2. 内容

（1）全校集会での取り組み

今年度は、COVID-19感染予防対策として、全校の幼児児童生徒が集う学習形態ではなく、各学級に大型モニターを設置するなどの視聴環境を整備し、スライドや動画をZoomで共有しながら行うオンライン学習とした。第1回、2回、4回については学習する内容を担当から説明後、師範ビデオなどを活用し、各クラスで取り組んだ。第3回については、講師の先生と子供達がZoom画面を通して折り方を教授頂き、子供達が完成した作品を見せて報告をする形式とした。全4回の活動内容は図1に示す。

（2）アスリート交流（製菓交流会）

新潟アルビレックスランニングクラブ所属、陸上競技女子やり投げ右代織江選手と交流を行なった。COVID-19感染予防対策として、Zoom画面を通して自己紹介や製菓活動に取り組んだ。製菓の内容については、作業製品で取り扱っている品目の中からアスリートが希望するお菓子（バスク風チーズケーキ、フィナンシェ）とした。（写真1.2）

実施時期	学習内容	教材
第1回 9月	「オリンピック・パラリンピックの精神」について オリンピック・パラリンピックについて知ろう ・アスリートからの応援メッセージの視聴 ・東京五輪音頭を踊ろう（大塚バージョン） ・ファイトの歌 ※全校集会で周知後各クラスで実施	スティックバルーン 師範ビデオ
第2回 10月	「スポーツ」について アダプテッドスポーツ体験 ・アスリートからの応援メッセージの視聴 ・カローリング ・ビーンボーリング ・ドッチビー ※全校集会で周知後各クラスで実施	カローリング メジャー、ベットボトル ビーンボーリング 補助台 ドッチビー 師範ビデオ 得点カード
第3回 11月	「文化」について 日本文化を知ろう・折り紙教室 講習内容（折り紙で作った作品） 家、乗り物、動物、腕時計、ハート ハートに関しては、五輪モニュメント作成として取り組む。 ※Zoomを活用し、折り紙講師と一緒に取り組む	折り紙 iPad 師範ビデオ
第4回 12月	「環境」について バーチャルオリンピック オリンピック・パラリンピアンと勝負しよう 陸上選手、水泳選手の記録に挑戦 ※全校集会で周知後各学級で実施	ミライの体育館

図1. 全校集会での取り組み内容（全4回）



写真1. 右代選手との自己紹介の様子



写真2. お菓子作りに取り組む様子

3. 成果と課題

(1) 全校集会での取り組み

第1回では、学部ごとに東京五輪音頭を踊った。幼児児童生徒がオリンピック・パラリンピックへの思いを込めて、スティックバルーンに装飾をし、音楽に合わせて楽しく踊る姿はとても素晴らしかった。オリンピック・パラリンピックの開催時にもぜひ、楽しく応援する気持ちを持って観戦してほしい。第2回では、アダプテッドスポーツに取り組んだ。廊下を利用して、カローリングディスタンス競争をしたり、ペットボトルを倒す的当てをしたりと各学部で楽しみながら取り組むことができた。第3回の折り紙では、五輪の輪をイメージして五色の折り紙を用いてハートの作り方を講師よりご教授頂いた。それぞれの学部で担当したハートを持ち寄り五輪の輪への貼り付けを行なった。(写真3) 学部ごとに取り組んだ作品を全校幼児児童生徒が貼り合わせるにより、大塚の五輪モニュメントが完成した。完成した作品を見て、日常の中で自分たちが見る五輪の輪と同じであることに気づく生徒もいた。第4回では、実際の陸上選手や水泳選手、走り幅跳びの選手の競技スピードを体感する学習を行った。



写真3. 大塚の五輪モニュメント

(2) アスリート交流（製菓交流会）

通常の製菓活動時に担当として作っている生徒達が右代選手へお菓子作りを伝える先生役になった。先生役となった生徒達は、身振り手振りなどを交えたり、実物を見せたり、教師が言葉を添えたりすることで最後まで成し遂げることができた。右代選手も生徒の教えを受け、お菓子を完成させることができた。交流の最後には、右代選手からお菓子作りが楽しかったこと、オリンピックに向けて勇気をもらったなどのメッセージをもらうことができた。生徒たちは一様にとても充実した表情であった。

4. 今後の予定

全校集会での取り組んだ「スポーツ」、「環境」の内容については、体育などの学習で再度取り組む予定である。次年度は各学部の実態に合わせたオリンピック・パラリンピック教育を実施していく。

コロナ禍における“する”スポーツの実践事例 ～オンラインでのポッチャ～

附属桐が丘特別支援学校 寒河江 校

1. 対象と目標（ねらい）

コロナ禍での肢体不自由児の体育の学びの実態

- ・基礎疾患を有する児童生徒が大半を占め、感染予防のため登校を自粛することなどにより、対面での授業を受けることが難しい。
- ・対面での指導においても、感染予防に配慮した学習内容により、対人的な種目を通じて学ぶことが難しい。
- ・当校の取り組み「桐が丘オンライン学校」

リンク：<https://www.kiri-s.tsukuba.ac.jp/kos/>

上記のような、身体的、環境的な難しさのある肢体不自由特別支援学校に在籍する児童生徒の生徒に対して、「考える、聞き合う・伝え合う」に重点を置いたオンラインでのポッチャの指導を実施した。指導では、対面での指導と継続して、ポッチャの種目特性に加え、仲間とともにプレイを進める協同的、対話的な学習をねらいとした。

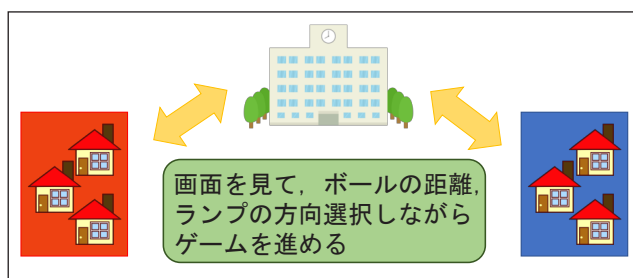


図1. オンラインポッチャについて

2. 内容

本実践では、ポッチャのクラス分け BC3 に該当する選手のプレイを参考に内容を考えた。（図2）各家庭と学校を会議アプリ（Zoom）でつなぎ、話し合いをしながらゲームを進める、ポッチャのゲームにおけるペア戦、チーム戦の要領でゲームを行った。プレイの実際は、仲間と相談して決めた作戦を実行するために、ランプの方向やボールの距離等をオンラインでアシスタントに指示を出し、ゲームを進めた。単元の始めは、話し合いの進め方を参考にするため、ブレイクアウトルームは活用せず、相手チームの作戦を聞きながら段階的に学習活動を展開した。（図3）



図2. BC3 クラスについて



図3. 学習の様子について

1球ごとに戦況が変わる中で、作戦を考え、プレイを選択していくために必要な技能として、「目標までの距離の測り方」「球種の選択」について学習した。（図4、図5）

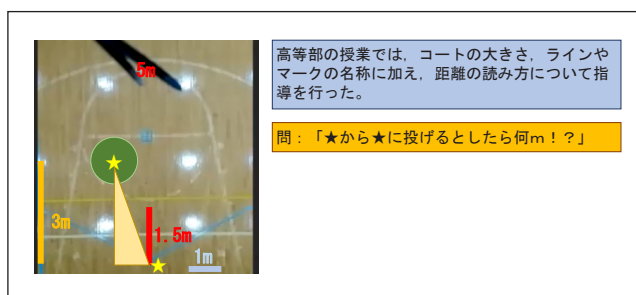


図 4. 指導例①「距離をよむ」

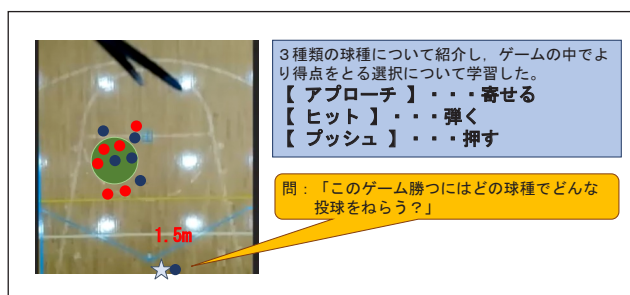


図 5. 指導例②「球種の選択」

3. 成果と課題

【成果】

- ・登校することが難しい生徒に対して、「思考・判断・表現」に重点を置いた学習を展開することができた。
- ・他校との交流、遠隔合同授業等での学習の機会の可能性を感じるものとなった。

【生徒の感想】

- ・オンラインだと先生にボールを投げていただくので自分で投げるということを経験はできないけれど、先生や人にもものを正確に分かりやすく伝えるという練習にはなれたと思う。
- ・なかなかコミュニケーションを取ることはできず、投げるだけといったことをしたので、みんなで体育館などの場所でポッチャをして交流を深めたいと思った。

【課題】

- ・ポッチャの指導事項の検討が必要
- ・通信環境、情報機器の整備が必要
- ・ボール、ランプ等の道具の調整
- ・対面指導と遠隔指導の学びの連続性

4. 今後の予定

オンラインでのポッチャを1つのツールとして、学校間交流や部活動の対外的な活動等で活用していきたいと考える。

5. その他

【機器接続構成】

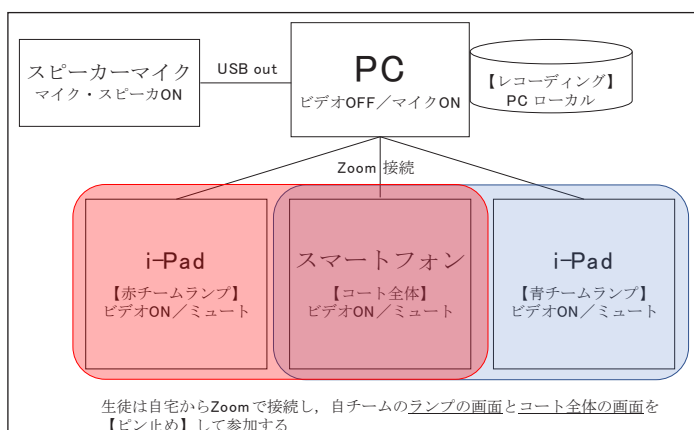


図 6. 接続機器の構成



写真 1. 映像配信の実際

ボッチャを活用した実践

附属久里浜特別支援学校 河場 哲史

1. 対象と目標（ねらい）

- (1) 対象児童：小学部 5 年
- (2) 目標（ねらい）：オリンピックやパラリンピックに関連する競技を知ったり、経験したりすることを通して、オリンピックやパラリンピックへの興味や関心を高めるとともに、スポーツをすることの楽しさを感じることができる。

2. 内容

次	時間	日にち	ねらい	指導内容	教材・教具
一	1/14	10/9	・ボッチャで使う道具の名前が分かる。	・道具の使い方と名前を確認する。	ボッチャボール ランプ
	2/14	10/16	・ボッチャボールを投げたり、ランプを使って転がしたりして、的に当てることができる。	・ボールの転がり方の違いを知る。 ・的に当てる。	
二	3/14	10/28	・ジャックボールに「近い人が勝ち」のルールを理解し、自分なりの方法でボールを投球する（ジャックボール固定）。	・道具の使い方と名前を確認する。 ・的に当てる。 ・画面に映ったボールの距離を確認しながら、一番近くの人が勝ちであるというルールを知る。	ボッチャボール ランプ テレビ パソコン
	4/14	11/5			
	5/14	11/12			
	6/14	11/19			
	7/14	11/26			
	8/14	12/3			
	9/14	12/17			
三	10/14	12/24	・ルールを理解し、自分なりの方法でボールを投球する（ジャックボール固定なし）。	・的に当てる。 ・画面に映ったボールの距離を確認しながら、一番近くの人が勝ちであるというルールを知る。	ボッチャボール ランプ テレビ パソコン
	11/1	2/4			
	12/14	2/18			
	13/14	2/25			
	14/14	3/4			

3. 成果と課題

(1) 成果

道具の名前を知る、転がり方を知る、的に当てる、と段階を踏んで体験することで、無理なく活動に取り組むことができた。また第一次では、導入という位置付けから、物理的的な意を用いた。その的にボールが当たると、的と連動してディスプレイに映したスライドが変化し、馴染みのある友達や教員の顔写真が現れる仕組みを用いた。このことで、児童は意欲的に的にねらうことができた。同時に楽しみながら道具の使い方に慣れ、スムーズに第二次に移ることができた。

第二次では、物理的的な意から、よりボッチャのルールに近づけるために、ジャックボールに「近い人が勝ち」というルールで実施した。第一次から難易度を上げすぎないようにするために、ジャックボールを固定して実施した。第一次でランプを用いた活動に慣れていたので、ランプ上部からジャックボールを覗き、ねらいを定めてボッチャボールを転がすようになっていった。併せて、先に実施をした友達のボールの転がり方を見て、スロープの長さを自ら調整する姿も見られるようになった。また、どのボッチャボールがジャックボールに近いかを分かりやすく示すために、ジャックボール上空に web カメラをセットし、前面のディスプレイに映すことも行った。このことで、勝敗を自分たちでも判断できるようになり、勝利を心から喜んだり、「次は頑張る。」と意欲を言葉にしたりする様子が見られた。これらの競技に向かう姿勢は第三次でも変わらず、意欲的に競技を行うことができた。

(2) 課題

今年度はコロナ禍ということもあり、外部講師を招聘しての体験学習や、他の学級と一緒に活動したり、交流校と対戦したりなど、当初考えていた活動ができなかった。

4. 今後の予定

前記の課題を踏まえ、今度の予定として次の2点を挙げる。

- ・外部講師を招聘しての体験学習
- ・交流校などとの対抗戦の実施



写真1. ポッチャの道具に初めて触れる児童



写真2. ねらいを定める児童の様子



写真3. ディスプレイに映しながらルールを説明する教師

フランシュ・コンテ大学オリンピック研究センター (CEROU) の組織的構造と活動内容 La structure et le plan d'action du Centre d'Études et de Recherches Olympiques Universitaires (CEROU) de l'Université de Franche-Comté

フランシュ・コンテ大学副学長（オリンピズム担当）、大学オリンピック研究センター（CEROU）ディレクター

エリック・モナン（Éric MONNIN）

フェリス女学院大学教授、CEROU 招聘研究員 和田 浩一（Koichi WADA）



はじめに：本報告の目的と背景

2016 年 8 月 21 日、第 31 回オリンピック競技大会の閉会式がリオ・デ・ジャネイロで執り行われた。その式典において、オリンピック旗がリオ市のエドゥアルド・パエス市長から、国際オリンピック委員会（IOC）のトーマス・バッハ会長を経て、2020 年大会を開催する東京都の小池百合子都知事に手渡された。このオリンピック旗の引き継ぎ式は、オリンピック・ムーブメントの中心が南米のリオ・デ・ジャネイロからアジアの東京へ移ることを象徴するものだった。

2021 年 8 月 8 日に予定されている東京大会の閉会式では、オリンピック・ムーブメントの中心が、今度はアジアの東京からヨーロッパのパリに移ることが、テレビを観る世界中の人々の目に刻まれよう。

オリンピック・ムーブメントの中心が移動するということは、これを送り出す側の視点に立てば、ムーブメントにかかわるさまざまな活動を総括し、次のムーブメントのために有効な提言をまとめる時期に来ていることを意味する。他方、これからムーブメントを担っていく側の視点に立てば、過去の経験に学びつつ、次の時代に適合する新しいムーブメントを創造し、これを実践していく責務を負う立場になったことを意味する。

オリンピック研究センターは、ムーブメントの継承にとって極めて重要な役割を担っている。なぜなら、オリンピック研究センターは、オリンピックを巡るさまざまな現象に関連する研究や、オリンピズムという教育理念・思想に基づく教育活動、これらに関する情報発信を行う自発的な機関、言い換えれば、オリンピック・ムーブメントの中心に位置づく総合的なプラットフォームだからである。大会組織委員会は大会終了後に解散しその実態がなくなるという現実、センターの重要性をさらに強調してくれる。

フランスで唯一、IOC からオリンピック研究センターとして認められているフランシュ・コンテ大学オリンピック研究センター（CEROU、セルー）は、この意味で、2024 年パリ競技大会の前のみならず、大会後のムーブメントにも一定の影響を与える重要なセンターと見なせよう。

本報告の目的は、CEROU 誕生の背景とその組織的構造、基本方針、活動内容を紹介することである。2024 年パリ競技大会を中心に展開される次のオリンピック・ムーブメントの中で、フランスのオリンピック研究センターがどのような立ち位置にあるのかを知ることは、2021 年の東京大会後もムーブメントに関与し続けることを希望する日本のオリンピック関係者に、これから進むべき道筋を戦略的な視点から開いてくれるものとなるだろう。

1. CEROU 誕生の背景

2017 年 9 月、2024 年オリンピック・パラリンピック競技大会の開催地がパリに決まった。このような状況の中、フランシュ・コンテ大学は、オリンピズムという新しいテーマを通して研究の新機軸を打ち出した。オリンピックのコンセプトは、フランスの高等教育・研究・イノベーション省（Ministère de l'Enseignement Supérieur, de la Recherche et de l'Innovation）が要請する今日的な課題と完全に一致している。その主な目的はスポーツの実践を、オリンピズムとその価値にかかわる教育や文化、市民のチャレンジ精神とに結びつけることである。

1. フランスにおける教育の質保証ラベル「2024 年世代」

2019 年 2 月 4 日、後述する「オリンピック・パラリンピック週間」の始まりに合わせ、「2024 年世代（Génération 2024）」と名づけられた教育の質保証ラベルが、高等教育・研究・イノベーション省および国民教育・青少年・スポーツ省（Ministère de

l'Éducation Nationale, de la Jeunesse et des Sports) からフランシュ・コンテ大学に付与された。フランシュ・コンテ大学は、大学教育の質を保証するこのラベルを最初に取得した 24 大学のうちのひとつである¹。

大学に付与されたこのラベルは、研究やスポーツの推進、オリンピックの価値に深く関わる学内の施策を通して、10 年以上にわたって行われてきたオリンピックにかかわる活動を顕彰するものである。

CEROU のプロジェクトは、この地域における研究の魅力とその波及効果を高めることを目的に、2019 年 9 月 20 日に正式にスタートした。本プロジェクトは、IOC と 2024 年パリ・オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会、フランス・オリンピック・スポーツ委員会（フランスの国内オリンピック委員会）、国民教育・青少年・スポーツ省、国際フランス語圏競技大会委員会の支援を受け、公式発表の際には、スポーツ大臣のロクサナ・マラシネアヌ氏による支援の意が示された。その約 3 か月後の 2019 年 12 月 10 日、フランシュ・コンテ大学理事会において、CEROU の設立が全会一致で可決された。

2. IOC 公認のオリンピック研究センター

IOC はオリンピック研究センターを次のように定義している。

大学のオリンピック研究センターは、教授と研究者、博士課程の大学院生たちの協力により運営される研究センターである。その目的は講義や研究、出版、講演会といった大学での活動を通し、オリンピックに関する知識を創造するとともに、主として学生たちに向けてこれらの知識を普及させることである（他のグループも対象にすることができる）。この定義に該当するオリンピックに関する講座もまた、オリンピック研究センターと見なされる²。

スイスのローザンヌに拠点を置く IOC のオリンピック研究センターは、2014 年以降、世界中のオリンピック研究センターのリストを更新し続けている。これは、IOC がオリンピック研究の推進に継続的に関与していく意思の表れである。リストアップされたのはいずれも、オリンピックを巡るさまざまな現象に関する研究と教育、情報発信を行っている組織である。

2021 年 4 月現在、ローザンヌのオリンピック研究センターは 20 カ国の 47 機関を、大学のオリンピック研究センターとして正式に登録している。これらのうち、8 カ国はオリンピック研究センターを 2 機関以上有しているが、他の 12 カ国は 1 機関のみである。ちなみに、IOC が公認しているフランスと日本のオリンピック研究センターは、それぞれ 1 機関、すなわち CEROU と CORE（筑波大学オリンピック教育プラットフォーム）³である。

ちなみに、世界で初めてのオリンピック研究センターは、ウェスタン・オンタリオ大学の国際オリンピック研究センター（カナダ）と、バルセロナ自治大学の UAB オリンピック・スポーツ研究センター（スペイン）であり、いずれも 1989 年に誕生した。

大学内に設置されるオリンピック研究センターは一般的に、学部や学科、他の研究組織の一部に組み込まれており、研究の推進と、学士と修士、博士の学位を授与する機能とを有している。

II. CEROU の組織的構造と基本方針

1. フランシュ・コンテ大学における CEROU の位置づけ

フランシュ・コンテ大学が設置した CEROU は、大学内の研究室や事務部門など、大学を構成するすべての部門を横断する大規模なプロジェクトである。

その目的は大学の内外で行われているオリビズムに関する研究や教育、調査を統合することであり、CEROU はこの目的にもとづき、大学内の諸機関との連携を調整し、共同の研究や教育、調査の立ち上げを推進している。

CEROU の正会員は、CEROU の基本方針に関連した教育・研究活動を行っているフランシュ・コンテ大学の教員と研究者、教員・研究者（法令にもとづく終身教授）のすべてである。また、フランシュ・コンテ大学以外の個人または法人で、CEROU の基本方針に関連した活動を行っているものは、後述する CEROU の戦略運営委員会（Comité d'Orientation Stratégique）の合意を得た上で、連携会員になることができる。つまり、CEROU は第三者機関と結ぶ契約の枠組みの中で、フランシュ・コンテ大学以外の研究部門や研究ユニットのチームと提携することができる。

CEROU は以下の点で、当地域をアピールする絶好の機会を創出している。

- フランス国内外における地域の魅力
- フランス国内外における知名度

- フランス国内外における認知度
- イノベーションへの意欲
- オリンピズムに関する研究（研究、出版ほか）
- 研究者や学生を対象とした活動とそのノウハウ
- IOC やフランス・オリンピック・スポーツ委員会、パリ競技大会組織委員会など、国内・国外組織へのサポートの強化

2. ディレクター

ディレクターは CEROU を指揮・監督し、戦略運営委員会と連携して、以下の業務を担当する。

- 戦略運営委員会が決定した CEROU の教育・学術プログラムを実施すること。
- 戦略運営委員会が設定・決定した目標を達成するための施策を実行すること。
- CEROU の運営に留意するとともに、フランシュ・コンテ大学の上部組織および学外のパートナーに対し CEROU を代表すること。
- 戦略運営委員会の会議日を決定すること。
- 戦略運営委員会の委員による提案にもとづき、会議の議題を決定すること。
- CEROU が資金を得た場合、予算配分案を戦略運営委員会に提案すること。
- 年に一度、CEROU が実施した活動とその成果を戦略運営委員会に報告すること。
- 年に一度、CEROU の活動内容をフランシュ・コンテ大学理事会に報告すること。

3. 戦略運営委員会

CEROU にはディレクターが議長を務める戦略運営委員会が置かれ、次のように割り当てられる 20 名の委員で構成されている。

- 1) CEROU のディレクター（1 名）
- 2) フランシュ・コンテ大学内に 5 つある、以下に掲げる研究ユニット（collégium）に所属する教員と研究者、教員・研究者の中から、各ユニットの責任者が選んだ委員（10 名）
基礎および応用科学／健康・スポーツ科学／人間科学・人文科学／法律学・経済学・経営学／自然学・環境学・地域学
- 3) 地方自治体の代表者（4 名）
ブルゴーニュ・フランシュ・コンテ（Bourgogne-Franche-Comté）地域圏評議会／ドゥー県（Doubs）議会／ブザンソン広域都市共同体（Grand Besançon Métropole）／ブザンソン（Besançon）⁴
- 4) 学長が任命するフランシュ・コンテ大学事務部門の代表者（2 名）
国際関係・フランス語圏関係部長／進路・研修・就職サービス部長
- 5) 候補者を募集した後、1)～4) の委員 17 名によって選出されるオリンピック界の代表者（3 名）
ヨーロッパ・スポーツ・アカデミー／ピエール・ド・クーベルタン家族会／グルノーブル・オリンピック競技大会音楽院・天文台・研究所⁵

戦略運営委員会の委員の任期は 5 年であり、更新は可能である。なお、CEROU の活動から離れた委員は戦略運営委員会の委員を辞任し、後任と交代する。また、戦略運営委員会の特定の議題について、ディレクターは議決権を持たない一人ないしは複数の学外専門家を招くことができる。投票数が同数の場合は、議長のディレクターが裁決権を行使する。

戦略運営委員会は、戦略的な基本方針を実行することにおいてディレクターを補佐する。具体的には、以下の案件について決定・承認する権限を有している。

- 教育・学術プログラム
- 設定された目標を達成するための施策
- CEROU が資金を得た場合にディレクターが提案する予算配分案
- ディレクターが作成する CEROU の年次報告書

これに加え、戦略運営委員会は以下のことについて助言する。

- 個人あるいは法人から CEROU へなされるすべての新規加盟申請
- CEROU の組織と機能に関するあらゆる施策

4. 4つの基本方針

フランシュ・コンテ大学は CEROU の設立にともない、以下に掲げる 4つの戦略的基本方針に沿った教育および研究に関する施策を推進している。

A. 研究

CEROU が実施する研究に関連する学術プログラムは、次のとおりである。

- フランシュ・コンテ大学と他大学との間で研究者間のネットワークをつくり、その交流を深めること。
- 国際的なシンポジウムや講演会、セミナーを開催すること。
- 修士課程および博士課程に在籍する大学院生の指導を支援すること。
- センター内で実施・指導された研究を、とりわけ国内外の主要ジャーナルで出版・発表することを奨励すること。

B. 教育・養成

CEROU が実施する教育・養成プログラムは、次のとおりである。

- 学生の交換および受け入れ
- 他のオリンピック研究センターを通じた学術知識の伝達
- 他大学（韓国、ギリシャほか）との提携による新学位創設の推進
- オリンピズム、オリンピック競技大会、オリンピック・ムーブメントの活動に関する指導プログラム

C. 専門知識

CEROU が目標とする専門性は、次のとおりである。

- 国際ジャーナルの創刊
- フランス内外で展開されている「オリンピック」にかかわる活動の分析
- IOC、オリンピック研究センター、国内オリンピック委員会、各国際スポーツ連盟、世界アンチ・ドーピング機構などとの関係強化
- オリンピックに関する知識の進化や研究の推進を目的とした、客員研究員や教授、学生向けリソースの開発

CEROU にはすでにセンターで研究中の、あるいは研究を予定している複数の外国人研究者と学生がいる（韓国、ギリシャ、日本、コロンビア他）。2020～2021 年にかけてはフェリス女学院大学教授の和田浩一が、「初等・中等・高等教育機関におけるオリンピック教育の日仏比較」をテーマに CEROU で研究に従事した。

D. プロモーション

オリンピズムの推進について CEROU が定めている目標は、次のとおりである。

- 一般を対象とした国内および国際イベントの開催
- 小中高校と連携したイベントの立ち上げ

III. CEROU の教育活動

フランスでは現在、学校暦（9月～翌年7月）に以下の3つの行事が組み込まれている。これらは「小中高校・大学のスポーツ年」（2015～2016年）と「小中高校・大学のオリンピズム年」（2016～2017年）、教育の質を保証する「2024年世代」ラベル（2019年～）を背景にしたものである。

- 1) 9月の「全国学校スポーツ・デー」（2010年～）

2) 2月の「オリンピック・パラリンピック週間」(2017年～)

3) 6月の「オリンピック・デー」(1948年～)

CEROUはとりわけ、2024年パリ競技大会組織委員会が推進する「オリンピック・パラリンピック週間」に積極的に関わっている。

A. 「全国学校スポーツ・デー」

2010年5月25日、教育省は「全国学校スポーツ・デー」を新たに定め、初年度のイベントを同年9月22日(水)に行うことを発表した⁶。その目的は、新学期の開始に合わせすべての学校で身体活動を再開することである。

2020年9月23日(水)には、国民教育・青少年・スポーツ省が旗振り役となり、「健康および活力の回復」をテーマにした第11回「全国学校スポーツ・デー」が実施された⁷。

この「全国学校スポーツ・デー」は、欧州委員会が2015年に始めた「ヨーロッパ・スポーツ週間」に組み込まれている。2019年の「ヨーロッパ・スポーツ週間」では、28,300のプロジェクトに、ヨーロッパ42カ国の1,500万人以上が参加した⁸。

B. 「オリンピック・パラリンピック週間」

2024年パリ競技大会組織委員会は、大会招致活動の最終局面を迎える2017年に、「オリンピック・パラリンピック週間」をスタートさせることにした。対象はすべての初等・中等・高等教育機関、つまり幼稚園児から大学生までのすべての年齢層である。

「オリンピック・パラリンピック週間」は、9月に組み込まれている「全国学校スポーツ・デー」と、1948年にIOCが制定した6月23日の「オリンピック・デー」との中間に置かれている(表1)。

表1. 「オリンピック・パラリンピック週間」の概要：2017～2021年

回	開催年月日	参加機関の数	参加者(人)	参加オリンピック人(人)	テーマ	プロジェクトの数
1	2017年1月21-29日	—	11,000	—	—	40
2	2018年1月27日-2月3日	500	80,000	100	—	500
3	2019年2月4-9日	1,500	180,000	150	男女の共存	1,300
4	2020年2月3-8日	2,800	450,000	200	異文化間の交流	1,600
5	2021年2月1-6日	3,000	500,000	—	健康	—

2024年パリ競技大会組織委員会が掲げる「オリンピック・パラリンピック週間」の教育目標は、次のとおりである。

- 教育の現場でスポーツを教育学のツールとして活用すること。
- 利用可能な教育・娯楽ツールを活用して、オリンピックとパラリンピックの価値への意識を高めること。
- スポーツ団体と協力してスポーツの体験講座を開き、オリンピックおよびパラリンピックの種目を紹介すること。
- パラ・スポーツの発見をベースに、パラ・スポーツを実際にやってみたり、障害のある人と一緒にスポーツをしたりしながら、障害に対する人々の見方を変えること。
- 若い人たちにボランティアや市民活動への関心を喚起すること⁹。

「オリンピック・パラリンピック週間」は海外領土を含むフランス全土で、さらには海外のフランス人学校でも実施されている。これは、フランス・オリンピック・スポーツ委員会が数年前に開始した「オリンピック・クラス」(学校のカリキュラムにオリンピックやスポーツ文化を取り入れる教育プログラム)の計画を補完するものとなっている¹⁰。

表2は、CEROUが2019年と2020年に関わった「オリンピック・パラリンピック週間」のイベントである。

表 2. CEROU が関わった「オリンピック・パラリンピック週間」のイベント：2020～2021 年

年 月 日	開 催 地	機 関	参加者数 (人、概算)	内 容
2020 年				
1 月 20 日～2 月 21 日	ピュイレイ・レ・ヴィーニュ *	中学校	300	講演会、展示会
2 月	グレイ **	高校	50	会議、講演会
1 月 30 日～2 月 8 日	モンベリアール *	ドゥー県オリンピック・スポーツ委員会	220	講演会、展示会
2 月 3 日	パリ	フランス大学スポーツ連盟	300	オリンピック・デーの講演会
2 月 4 日	パリ	国立スポーツ体育研究所	150	講演会（スポーツ文化）
2 月 3 日～28 日	ブザンソン *	フランシュ・コンテ大学	450	展示会
4 月 16 日	ブザンソン *	フランシュ・コンテ大学	600	「文化・スポーツ・教育デー」
2021 年				
2 月 3 日	北アメリカ	海外フランス留学支援機構	1,208	講演会（オンライン）
2 月 4 日	ピュイレイ・レ・ヴィーニュ *	中学校	300	講演会、展示会
2 月 1 日	ブザンソン *	高校	3 年生 5 クラス	講演会、討論会
2 月 1 日～2 月 6 日	パリ	フランス大学スポーツ連盟	SNS	オンライン・クイズ
2 月 1 日	パリ	国立スポーツ体育研究所	SNS	ポッドキャスト、映像配信サービス
2 月 1 日～28 日	ブザンソン *	フランシュ・コンテ大学	SNS	展示会、映像配信サービス

* ドゥー県内の市町村、すなわち CEROU の地元およびその周辺

** 南東側をドゥー県と接するオート＝ソーヌ県（Haute-Saône）内の市町村

◎ フランスの地方行政区画については、注 4 を参照のこと。

2020 年 2 月に行われた 4 回目のテーマは、「異文化間の交流」であった。これはもちろん、同年 1 月に開催されたユース・オリンピック競技大会（ローザンヌ）と、第 32 回オリンピック競技大会（東京、2020 年 7～8 月に開催予定）とを視野に入れて決定したものである（東京大会は新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、2021 年 7～8 月に延期）。フランスでは小学生に該当する 6～11 歳の児童のうち、92%の女子と 82%の男子が十分に運動していないという憂慮すべき結果が出ており、国民教育・青少年・スポーツ省と 2024 年パリ競技大会組織委員会、スポーツ団体の 3 者は協力して、「一日 30 分の身体活動」プロジェクトの開始を決定した¹¹。

これは、2018 年 3 月 26 日に開かれた全省庁横断型の健康委員会に、総理大臣と国民教育・青少年大臣が提案した「健康増進学校」という継続的な教育政策の一環である¹²。2020 年 3 月 11 日に世界保健機関の事務局長テドロス・アダノム・ゲブレイェソス博士が新型コロナウイルス感染症の世界的流行を発表した後、座りっぱなしのライフスタイルと戦い、身体活動を促すという「一日 30 分の身体活動」プロジェクトの目的に、深刻な健康への危機が加わった。

今、健康はかつてないほど、社会の関心を集めている。2021 年 2 月、2024 年パリ競技大会組織委員会は「オリンピック・パラリンピック週間」の活動をさらに強化するため、「健康」を 5 回目のテーマに掲げた¹³。

C. 「オリンピック・デー」

1894 年 6 月 23 日、クルセル男爵を議長とする「オリンピック競技大会復興のためのパリ国際会議」のメンバーは、各委員会の報告書を承認し、国際オリンピック競技大会委員会（Comité International des Jeux Olympiques）の設立を正式に発表した。それから約 50 年後の 1947 年 6 月、ヨゼフ・グルス博士はストックホルムで開催された第 41 回 IOC 総会において、オリンピック・ムーブメントの創設を記念し、6 月 17 日から 24 日の期間に各国でオリンピックの理念を推進するイベントを提案した。

翌 1948 年 1 月、サン・モリッツで開かれた第 42 回 IOC 総会において、「世界オリンピック・デー」というプロジェクトが採択された。初回の「オリンピック・デー」は 1948 年 6 月 23 日に、オーストリアとベルギー、カナダ、ポルトガル、イギリス、ギリシャ、スイス、ウルグアイ、ベネズエラの 9 カ国の国内オリンピック委員会によって実施された。IOC は 1978 年以降、各国のオリンピック委員会が「オリンピック・ムーブメントの推進を目的としたオリンピック・デーを、定期的に（可能であれば毎年）開催すること」を推奨している¹⁴。

1987年、IOCの「スポーツ・フォー・オール」委員会は、スポーツの実践をさらに展開・推進していくために、この日を記念したオリンピック・デー・レースの開催を提案した。

「オリンピック・デー」は、単なるレースやスポーツ・イベントではありません。現在では、オリンピック・ムーブメントを毎年祝う唯一の世界的なイベントというだけでなく、健康的かつ活動的な生活を推進する日にもなっています。「オリンピック・デー」の構成は「動く」「学ぶ」「発見する」という3つの柱に基づいています¹⁵。

2020年の「オリンピック・デー」は、新型コロナウイルス感染症の世界的流行の影響で制限の多いものとなったが³、以下の4つのアクションが用意され¹⁶、ヴァーチャルなレースには大勢の若者たちが集まった。

- 1) 「オリンピック・デー」にクラスみんなで参加して、写真をシェアしよう。
- 2) みんなで走って、「オリンピック・デー」のヴァーチャル大壁画を作ろう。
- 3) クラスでオリンピックの価値を共有しよう。
- 4) アスリートが子どもたちに挑戦！

フランス・オリンピック・スポーツ委員会は、「ハイブリッド」な「オリンピック・デー」プロジェクトを展開しました。これは一般市民や若者、生徒・学生を対象にした、デジタルとフィジカル（身体）の両方の活動を組み合わせたものです。このアクションは、伝統的な「オリンピック・デー」である6月23日を含む、2020年6月22～26日に行われました。（略）9月の「全国学校スポーツ・デー」や2月の「オリンピック・パラリンピック週間」と同じように、用意されたイベントには誰でも参加できたので、実に多くの人々がこのプロジェクトに参加してくれました¹⁷。

おわりに

「オリンピズムとは何か」という問いに、ピエール・ド・クーベルタン（1863～1937年）は次のように答えている。「それはエネルギーの宗教であり、男らしいスポーツの実践によって発達する集中的な意志への崇拝である。それは衛生と市民の意識をよりどころとし、芸術と思想に囲まれている」¹⁸。オリンピズムはオリンピックの復興者にとって、スポーツと知性を車の両輪と考え、これら二つの実践を若者の教育に役立てようとする一つのツールである。

オリンピズムの概念には多くの意味がある。それゆえ、実に多様な利害関係者がオリンピズムの目的に向かって協力していくことの同意を促す境界対象物（objet-frontière）¹⁹であるとも定義できよう。オリンピックの境界対象物は様々な当事者を、さらにはこれらの当事者が属するさまざまな社会をつなぐ接着剤としての役割を果たしている。オリンピズムは明らかに、社会に存在する多様な概念や、政治・経済・教育・哲学といった社会のさまざまな関心事の橋渡し役となっている。

オリンピック教育という概念は、1970年代以降のオリンピック研究に登場した。これはとりわけ、ドイツ人研究者ノルベルト・ミュラーの研究に負うところが大きい²⁰。オリンピズムはクーベルタンにとって、身体と精神の調和のとれた発達にもとづく教育を目指す最適な道（la voie）²¹であると言える。彼はこの教育モデルをオリンピック教育ではなく、スポーツ教育という概念を用いて表現しており、この事実はクーベルタンの著書『スポーツ教育学講義』（1921年）で確認できる²²。

「小中高校・大学のスポーツ年」（2015～2016年）と「小中高校・大学のオリンピズム年」（2016～2017年）、「2024年世代」という教育の質保証ラベルの立ち上げ（2019年）を背景に、フランシュ・コンテ大学はオリンピズム担当副学長のポストを新たに設け、フランス初の大学オリンピック研究センターとなるCEROUを開設した。CEROUは、フランス国内最高のスポーツ機関である国民教育・青少年・スポーツ省、同じく国内最高のオリンピック機関であるフランス・オリンピック・スポーツ委員会と2024年パリ競技大会組織委員会の支援を受けている。また、オリンピックの国際最高機関であるIOCからは、大学オリンピック研究センターとしての公認を得ている。CEROUは「スポーツの実践」と「オリンピックの価値」の研究・推進に深く関わる施策の一つの具体例であり、その本質的な目的は、フランス全土でオリンピック研究の魅力とその波及効果を高めることである。

注.

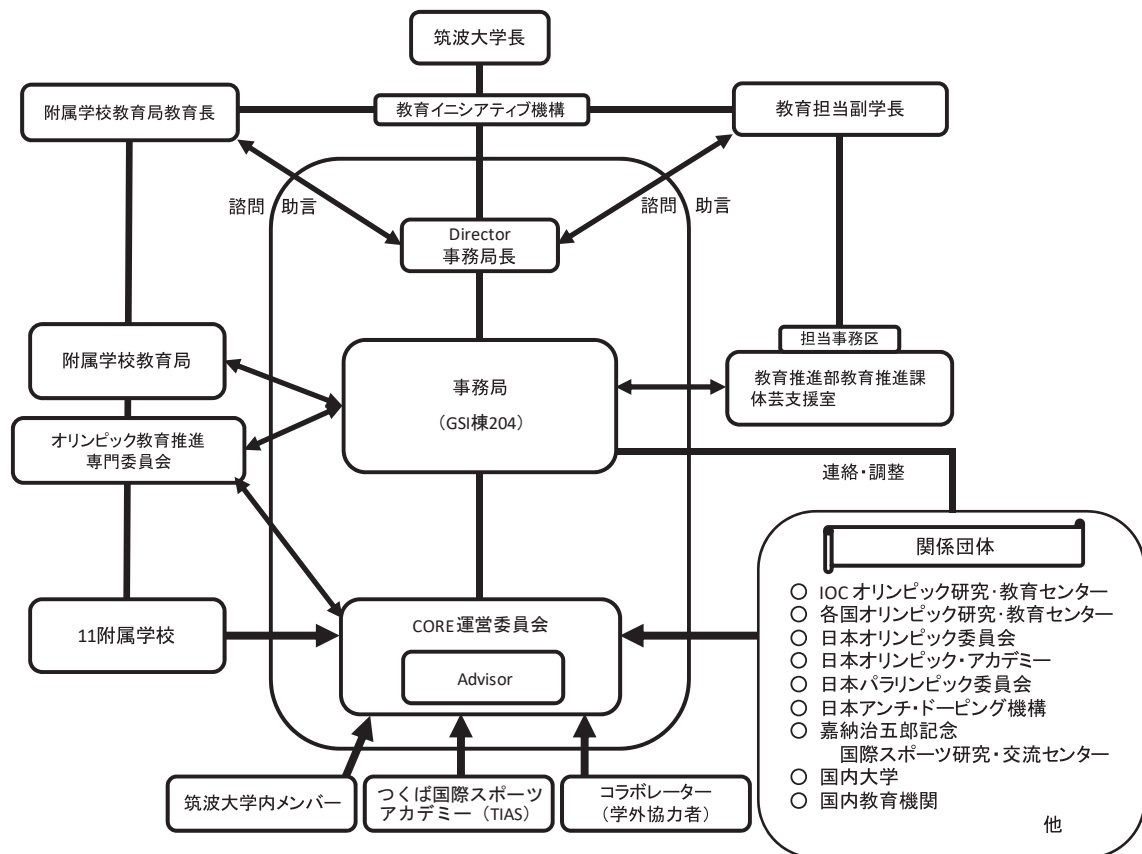
- ¹ Université de Franche-Comté (2019). L'université de Franche-Comté labellisée "Génération 2024." <http://actu.univ-fcomte.fr/article/luniversite-de-franche-comte-labellisee-generation-2024-007068> (本報告に記すウェブサイトの閲覧日はすべて、2021年4月18日である)。なお、「2024年世代」ラベルに関する英語の文献に、次の2点がある。Éric Monnin (2019). "From the "Year of Olympism, from school to university label" to "the Generation 2024" Olympic label: an Example within the University of Franche-Comté," *Diagoras: International Academic Journal on Olympic Studies*, n°3, pp. 193-205.; Éric Monnin (2020). The implementation of the Olympic education concept through "Generation 2024," 『オリンピックスポーツ文化研究』第5号、pp. 105-129.
- ² Centre d'Études Olympiques (2021). *Directives pour les centres universitaires d'études et de recherches olympiques, centre d'études olympiques*, Lausanne : Comité International Olympique, p. 2. <https://stillmedab.olympic.org/media/Document%20Library/OlympicOrg/Olympic-Studies-Centre/Academic-Activities-and-Network/Olympic-Studies-monitoring/Directives-centres-universitaires-detudes-et-recherches-olympiques.pdf>
- ³ Centre for Olympic Research and Education. なお、国別のオリンピック研究センターの数は次のとおり。コロンビア：9、スペイン：7、メキシコ/中国：5、ブラジル：3、ドイツ/韓国/スイス：2、南アフリカ/アルゼンチン/ベルギー/カナダ/チリ/フランス/イスラエル/日本/ノルウェー/ニュージーランド/ロシア/ウクライナ：1。Centre d'Études Olympiques (2021). *Centres universitaires d'études et de recherches olympiques dans le monde*. Lausanne : Comité International Olympique, pp. 2-10. <https://stillmedab.olympic.org/media/Document%20Library/OlympicOrg/Olympic-Studies-Centre/Academic-Activities-and-Network/Olympic-Studies-monitoring/Centres-universitaires-d-etudes-et-de-recherches-olympiques-dans-le-monde.pdf>
- ⁴ フランシュ・コンテ大学を擁する地方自治体を、規模が大きな順から並べた。地域圏 (région) : フランス国内に13ある最も大きな地方行政区画 > 県 (département) : 地域圏を構成する行政区画 > 都市共同体 (communauté urbaine) : 拠点となる大都市を中心に周囲の市町村が密接に結びつく、市町村間の協力形態 > コミュンヌ (commune) : 地方自治体の最小単位で、日本の市町村に相当。ここではプザンソン。
- ⁵ 1968年グルノーブル・オリンピック冬季大会のレガシーに関する活動をしている団体。
- ⁶ Ministère de l'Éducation Nationale (2020). *Bulletin officiel*, n° 31 du 2 septembre 2010, p. 16. <https://www.education.gouv.fr/media/50045/download>
- ⁷ Ministère de l'Éducation Nationale, de la Jeunesse et des Sports (2020). Journée nationale du sport scolaire. <https://eduscol.education.fr/cid57378/journee-nationale-du-sport-scolaire.html>
- ⁸ Sport-24 NET (2019). La santé physique et mentale au centre de la Semaine européenne du sport. <https://sport-24.net/2020/09/23/la-sante-physique-et-mentale-au-centre-de-la-semaine-europeenne-du-sport/>
- ⁹ Comité d'Organisation des Jeux Olympiques et Paralympiques Paris 2024 (2020). *La Semaine Olympique et Paralympique 5ème édition*, p. 4. <https://medias-generation.paris2024.org/2020-11/Guide%20Semaine%20Olympique%20et%20Paralympique%202021.pdf>
- ¹⁰ Ministère de l'Éducation Nationale et de la Jeunesse ; Ministère de l'Agriculture et de l'Alimentation ; Ministère des Sports (2018). *Développer les passerelles entre le monde scolaire et le mouvement sportif pour encourager la pratique physique et sportive des enfants et des jeunes*, pp. 12-14. [http://circulaires.ia80.ac-amiens.fr/2018-2019/04_03_2019_generation_2024_\(cahier_des_charges\)_classes_olympiques.pdf](http://circulaires.ia80.ac-amiens.fr/2018-2019/04_03_2019_generation_2024_(cahier_des_charges)_classes_olympiques.pdf)
- ¹¹ La plateforme éducation de Paris 2024 (2020). 30' d'activité physique quotidienne. <https://generation.paris2024.org/30-dactivite-physique-quotidienne>
- ¹² Ministère de l'Éducation Nationale, de la Jeunesse et des Sports. Priorité prévention : l'école promotrice de santé. <https://www.education.gouv.fr/priorite-prevention-l-ecole-promotrice-de-sante-6278>
- ¹³ Comité d'Organisation des Jeux Olympiques et Paralympiques Paris 2024 (2020). *La Semaine Olympique et Paralympique 5ème édition*, p. 1. (前出、注9)
- ¹⁴ Comité International Olympique (1978). *Charte olympique*, p. 47.
- ¹⁵ Comité International Olympique. Journée Olympique. <https://www.olympic.org/fr/journee-olympique>
- ¹⁶ Comité National Olympique et Sportif Français (2020). *Journée olympique 2020*. http://cache.media.education.gouv.fr/file/Mai_2020/14/6/Presentation_journee_olympique_2020_1299146.pptx

-
- ¹⁷ éduscol (2020). Journée olympique. <https://eduscol.education.fr/1600/journee-olympique>
- ¹⁸ Pierre de Coubertin (1917). « Les jardins de l'effort », *Almanach olympique pour 1918*, Lausanne : Réunies, p. 4.
- ¹⁹ 境界対象物（仏語：object-frontière、英語：Boundary Object）：Star and Griesemer によって 1989 年に提唱された、異分野間の問題解決に関わる概念。例えば、科学技術社会学では「それを利用する主体のそれぞれのニーズや制約に適応できる程度に順応性がありながらも、統一されたアイデンティティを保持できる程度に頑健なオブジェクト」との定義が広く用いられている。杉原太郎・内平直志・井川康夫（2010）「研究の上流過程で物語が Boundary object として果たす役割」『人工知能学会全国大会論文集』、p. 1.；石井敦（2018）「統合知を創出するための境界オブジェクトとしての人類世」『学術の動向』23(4), p. 82.
- ²⁰ Norbert Müller (2010). Olympic education. University lecture on the Olympics. https://ddd.uab.cat/pub/caplli/2010/181093/muller_eng.pdf
- ²¹ 柔道の「道」に重ね合わせて表現した。ちなみに報告者の一人であるエリック・モナンは、学生時代にフランスの柔道ナショナル・チーム（21 歳未満）に所属した経験を持つ judoka（柔道家）である。
- ²² Pierre de Coubertin (1921). *Leçons de Pédagogie sportive*, Lausanne : Concorde, pp. 10, 32, 38, 84 et 92.

筑波大学附属学校オリンピック教育推進専門委員会委員（令和２年度）

委員長	茂呂 雄二	附属学校教育局教育長
副委員長	雷坂 浩之	附属学校教育局教育長補佐
	濱本 悟志	附属学校教育局次長
	真田 久	体育系教授
	宮崎 明世	体育系准教授
	澤江 幸則	体育系准教授
	江上いづみ	客員教授
	清水 由	附属小学校教諭
	秋山 和輝	附属中学校教諭
	鯨島 康太	附属高等学校教諭
	登坂 太樹	附属駒場中・高等学校主幹教諭
	藤原 亮治	附属坂戸高等学校教諭
	山本 夏幹	附属視覚特別支援学校教諭
	岡本 三郎	附属聴覚特別支援学校教諭
	山口裕紀子	附属大塚特別支援学校教諭
	寒河江 核	附属桐が丘特別支援学校教諭
	河場 哲史	附属久里浜特別支援学校教諭

筑波大学オリンピック教育プラットフォーム組織図



オリンピック教育 vol.9 2020/04-2021/03

2021 年 7 月発行

発行者 筑波大学オリンピック教育プラットフォーム / 附属学校オリンピック教育推進専門委員会
発行所 オリンピック教育プラットフォーム (CORE) 事務局
〒305-8574 茨城県つくば市天王台 1-1-1 筑波大学 GSI 棟 204
事務局長 真田久
編集者 福田佳太
